

「伊勢崎署占拠・多喜二奪還事件」資料集

はじめに

本事件は1931年（昭和6年）9月6日より7日未明にかけて、佐波郡伊勢崎町・同郡茂呂村（ともに現伊勢崎市）において、発生した事件です。「伊勢崎（警察）署占領事件」として登場し、「伊勢崎（警察）署占拠事件」とよく呼ばれてきました。また、「伊勢崎（警察）署包囲事件」、「伊勢崎（警察）署襲撃事件」とも言われます。これらを短くした「伊勢崎（警察）署事件」、他に「文芸講演会弾圧事件」「小林多喜二奪還事件」もあります。私たちは「伊勢崎署占拠・多喜二奪還事件」を採用しましたが、「伊勢崎署包囲・多喜二奪還事件」もあり、地名そのものを冠した「伊勢崎事件」もあります。

本事件は、本資料集が提示するように、県内・県外の報道機関によって、歪められた形であるとはいえ、報道されていきました。しかし、日本軍国主義に引き起こされた戦争、敗戦と復興、反動化と再軍備、安保闘争などの激しい闘い等の中で、本事件は一時的にせよ、忘れられた事件となりました。その要因は決して単純なものではなく、複合的な要因が考えられますが、本事件そのものが自由と民主主義を求める運動、侵略戦争に反対し、平和を求める運動の一つとして見直されるようになったことは大きな前進です。

本事件を「伊勢崎警察署占領事件」として初めて公表したのは、事件当事者の菊池邦作さんでした。それは1960年のことで、「群馬県社会運動の歩み」の一節でした。既に本事件から29年経っていました。しかし、邦作さんは、事件の真相を残す必要を感じて、関係者の座談会も開き、『随筆柿』に「伊勢崎署占領事件」を書きました。1967年のことです。この論文と座談会記録が私達に事件の生々しさを今でも伝えていきます。この時期が、本事件解明の第一の波でした。その後様々な形で本事件が取り上げられるようになり、1979年発行された『群馬県百科事典』に「伊勢崎事件」の項目が立てられました。本事件解明をめぐる第二の波は1991年に刊行された『群馬県史』と『伊勢崎市史』によってもたらされました。ともに叙述は小池善吉さんの筆に依っています。それらは、新たに発見された資料も使い、本事件の歴史像をより客観的に叙述しました。また、本事件の解明を事件当事者による追求という段階から市民・県民の歴史の追求という段階に発展させました。このような中で、1993年の治安維持法犠牲者国家賠償要求同盟群馬県支部主催「多喜二没後六十周年記念集会」が開かれました。また今年発行されたばかりの『群馬県新百科事典』の「伊勢崎事件」では、前事典より叙述が詳しくなりました。

本事件解明をめぐる第三の波は、昨年、崎崎澄子・藤田廣登両氏から始まりました。何度も現地調査を重ね、本事件を市民・県民の歴史追求の段階から全国的・国民的な歴史追求の段階に引き上げ、多喜二研究との結合を実現しました。本実行委員会も微力ながら、その流れに沿えるよう活動してきました。会では、この「伊勢崎・多喜二祭」を機会に、この間発掘した新資料も含め、関連資料の該当部分を抜粋し、まとめることにしました。

1 本事件の資料

本事件の資料については、①事件当時の報道・記録資料 ②事件当事者の記録・記憶資料 ③同時代人の記録・記憶資料 ④事件叙述・研究資料（A） ⑤事件叙述・研究資料（B） ⑥事件再発掘叙述・研究資料 ⑦事件関係者関連資料 と分類しました。

本資料集は①⑥を該当資料より抜粋し、そのまま複写あるいは撮影し、印刷しました。コメントは資料①に若干付しましたが、他は控えました。研究利用に際しては原典で確認して下さい。以下に資料名を掲げて、目次とします。「新資料」の表示は①③に限ってあります。

①事件当時の報道・記録資料（1～11は年代順）……………3ページ

1 「東京朝日新聞群馬版・1931年9月5日」（原紙・前橋市立図書館）

2 「上毛新聞・1931年9月8日朝刊」（マイクロフィルム・群馬県立文書館）

3 「上毛新聞・1931年9月8日夕刊」（マイクロフィルム・群馬県立文書館）

4 新資料 「東京朝日新聞・1931年9月8日夕刊」（復刻版・高崎経済大学附属図書館）

5 「東京朝日新聞群馬版・1931年9月9日」（原紙・前橋市立図書館）

6 新資料 「社会運動通信・1931年9月9日」（復刻版、埼玉大学附属図書館）

7 「上毛新聞・1931年9月10日朝刊」（マイクロフィルム・群馬県立文書館）

8 新資料 「上毛新聞・1932年2月12日朝刊」（マイクロフィルム・群馬県立文書館）

9 新資料 「東京朝日新聞群馬版・1932年2月12日」（原紙・前橋市立図書館）

10 新資料 「上毛新聞・1932年2月13日朝刊」（マイクロフィルム・群馬県立文書館）

11 前橋地方裁判所管内、第二章第三項（ロ）プロレタリア文化同盟の一部（昭和七年一月至六月社会運動情勢（東京控訴院管内））、1933年4月、群馬県立図書館）

12 新資料 『時刻表復刻版・戦前戦中編2・1930年10月版』（1978年）

13 新資料 群馬県警察史編さん委員会「特高課の設置」の一部（『群馬県警察史・第2巻』所収、1981年）

14 新資料 「共栄館」の写真（丸一酒店）

15 新資料 光明社『伊勢崎町全図』（1934年、伊勢崎市立図書館）

②事件当事者の記録・記憶資料……………9ページ

1 菊池邦作「伊勢崎警察署占領事件」（群馬県社会運動の歩み（下））の一部、『労働運動史研究第19号』所収、1960年）

2 菊池邦作「伊勢崎署占領事件」（『随筆柿』所収、1967年）

3 菊池邦作「伊勢崎署占領事件の真相を語る座談会」（『随筆柿』所収、1967年）

4 新資料 菊池邦作「著者略歴」（『徴兵忌避の研究』所収、1977年）

5 新資料 村山知義「多喜二の思い出」（『東京芸術劇場公演パンフレット』所収、1968年）

6 新資料 堤源寿「団体協議会と伊勢崎警察署事件」（『治安維持法犠牲者国家賠償要求同盟

群馬県支部『月刊不屈ぐんま版』第3号、1993年)

7 新資料 菊池敏清・多喜二没後六十年記念集会の講演『ありし日の小林多喜二』について(1993年)

8 新資料 中野重治年譜の一部(『中野重治全集』別巻、年譜書誌索引、1998年)

③同時代人の記録・記憶資料：……………19ページ

1 伊藤信吉「群馬県の左翼運動・その断片」の一部(『回想の上州』所収、1977年)

2 富沢実「官憲弾圧のなかの府県会議員選挙」の一部(『群馬県社会運動物語』所収、1968年)

3 新資料 富沢実・多喜二没後六十年記念集会の講演「昭和六年九月六日文芸講演会弾圧事件について」(1993年)

④事件叙述・研究資料(A)……………23ページ

1 日本共産党群馬県委員会「小林多喜二奪還」(『日本共産党の六十年・群馬県』の一部、『前衛』第516号所収、1984年12月号)

2 伊勢崎市(中山邦隆)「第四章社会・生活の資料15とその解説」(『伊勢崎市史・資料編5近現代Ⅱ』所収(1987年))

3 伊勢崎市(平塚豊治)「第四章社会・生活の資料61とその解説」(『伊勢崎市史・資料編5近現代Ⅱ』所収(1987年))

4 伊勢崎市(小池善吉)「伊勢崎署占拠事件」(『伊勢崎市史・通史編』所収、1991年)

5 伊勢崎市(小池善吉)「消費組合運動」(『伊勢崎市史・通史編』所収、1991年)

6 群馬県(小池善吉)「文芸講演会と伊勢崎警察署占拠事件」(『群馬県史・通史編』所収1991年)

⑤事件叙述・研究資料(B)……………25ページ

1 富沢実「官憲に踏みじられた文芸講演会・伊勢崎署占拠事件起こる・たたかいた講師らの釈放」(『群馬県社会運動物語』所収、1968年)

2 群馬県労働運動史編さん委員会「警察を占拠する文化サークル」(『群馬県労働運動史(上)先駆けの人びと』、1974年)

3 稲沢潤子「一斉検挙と拷問」の一部(『自立する女性の系譜・お母さん弁護士平山知子の周辺』、1977年)

4 石原征明「伊勢崎事件」(『群馬県百科事典』所収、1979年)

5 矢島孝「民衆の勝利 伊勢崎警察署占拠事件」(『事件と騒動 群馬民衆闘争史』所収、1980年)

6 五十嵐富夫「初期の世相と伊勢崎事件」(『図説 伊勢崎・佐波の歴史』所収、19

85年)

7 「昭和6年群馬県の主なできごと」(『目で見る群馬県民の昭和史』所収、1987年)

8 丑木幸男「無産運動の分裂」(『群馬県の百年』所収、1989年)

9 石原征明監修「世相のみえる町並」(『写真集・群馬世相100年』、1992年)

10 「1931年作家小林多喜二検束」(『群馬の20世紀―上毛新聞で見る百年』所収、2000年)

11 関口正己「戦禍の中の暮らし」(『思い出のアルバムさよなら群馬の20世紀』所収、2000年)

12 石原征明「伊勢崎警察署が占拠される」(『ぐんまの昭和史(上)』所収、2003年)

13 「伊勢崎警察署」(亀田光三・川村勝保監修「目で見る 桐生・伊勢崎・みどりの100年」所収、2006年)

14 石原征明「伊勢崎事件」(『群馬新百科事典』所収、2008年)

⑥事件再発掘叙述・研究資料……………35ページ

1 藤田廣登「多喜二をかえせ!伊勢崎署包囲・奪還事件」(『小林多喜二とその盟友たち』所収、2007年)

2 北村隆志「民衆が多喜二奪還」(しんぶん赤旗日刊2007年12月31日付)

3 蛭崎澄子「伊勢崎における多喜二の足跡」(『多喜二・百合子研究会会報第183号』所収、2008年)

4 蛭崎澄子「伊勢崎署包囲事件」(『ガイドブック小林多喜二の東京』所収、2008年)

参考 多喜二の1931年の意味……………24ページ、小林多喜二略年譜……………38ページ

⑦事件関係者関連資料(文献の紹介のみ)

1 菊池邦作「日本軍国主義の払拭 戦争犯罪人と人民の声」(1946年)

2 菊池邦作「群馬県社会運動の歩み(上)」(『労働運動史研究第17号』、1959年)

3 菊池邦作「群馬県社会運動の歩み(下)」(『労働運動史研究第19号』、1960年)

4 菊池邦作「わが斗争の記」(『蚕糸絹情報』1977年3月11日〜8月11日)

5 稲沢潤子「自立する女性の系譜・お母さん弁護士・平山知子の周辺」(1977年)

6 伊藤信吉「群馬県の左翼運動・その断片」(『回想の上州』所収、1977年)

7 平山知子「若きちひろへの旅上・下」(2002年)

8 菊池敏清「民主新聞」(伊勢崎市図書館マイクロフィルム及び複製本)

9 菊池敏清発行「茂呂の菊池家家譜」(1977年)

10 野里洋「汚名―第二十六代沖繩県知事泉守紀」(1993年)

11 1995年9月9日放送「ETV特集 50年目の戦争秘話・決戦前夜の行政官たち―元沖繩県知事の日記より―」

裏面の密計 端なくも暴露

伊勢崎の検束騒ぎから 全協の魔手判明す

國際青年デーに際して左派運動は既戦の通り未然に食ひ止められたがこのデモ計謀から裏面における各種運動が暴露したらしく過激の群馬共産黨事件以来戦時的分子は絶滅されたかに見えたが伊勢崎町を中心に強壯とみに根を張つて全協の魔手動き一方ナツブの支局設置も進められて居た事實が明かとなり警察当局は取締り取締り

たくさまぎれに策動が行はれるではないかと尙補綴をとりからし警察中である

この記事は『伊勢崎市史・通史編』で初めて紹介された記事です。資料4の9月8日付東京朝日新聞の記事を「既報」として、この記事では、本事件の意味を探っています。

作家同盟員奪還に 警察署にデモ亂闘

青年隊と警官隊と 双方十数名負傷?

當局に於てはその口實として六日の國際無産青年デーを期してのデモに對する豫備盾檢束だと稱してゐる。

群馬縣伊勢崎町に於けるプロレタリア文藝會に出席の途次、血迷つた伊勢崎署に檢束されたナツブ作家同盟の小林多喜二、村山知義、中野重治比外数名を奪還するため七日午前二時頃石井繁丸、遠藤可彌氏其他を先頭にして、前橋伊勢崎の青年約五十餘名は、口々に官廳の横暴を叫び、デモを行いつつ伊勢崎署内に亂入したが、早くもそれと感知した官廳は特高課長指揮の下に、警官七十餘名を動員待構へてゐたので、俄然大衝突となり、右に交つて帽子、下駄が亂れ飛ぶ大亂闘を演じ双方十数名の負傷者を出した。その場で戦闘的分子二十餘名は檢束されたが、抗議により直ちに釋放された。尙檢束中の村山、小林、中野氏其他は、七日午前五時一先づ釋放されたが、地元の數氏は引續き留置取調べを受けてゐる。

この記事は初めて紹介される記事です。富沢実さんが『群馬県社会運動物語』や講演の中で、青森で伊勢崎署占拠事件を知り、故郷に帰らなくてはと思つたと語っています。それが、『社会運動通信』でした。それは、『日刊新聞』、全国の無産運動・労働運動・農民運動等のニュースを載せたものでした。記事内容は、8日付東京朝日新聞の記事と似ていますが、全国に伊勢崎署占拠事件の報が伝えられていたわけです。



5

大正後年代

現在の緑町、一心屋さんの南に当社の会館—共栄館が落成してその式典模様。
当店より月桂冠の72ト入り樽を百本寄贈している。

文芸講演会会場の「共栄館」の全景です。丸一酒店所蔵の貴重な写真です。



本地図は、戦前では唯一の地番入りの伊勢崎町の地図だそうです。写真撮影させて頂きました。伊勢崎警察署（仮庁舎）と会場の共栄館は直線距離で約500メートルです。会場の共栄館から伊勢崎署に向かうには、東西に走る「本町通り」を突っ切ることになります。

②事件当事者の記録・記憶資料

1 菊池邦作「伊勢崎警察署占領事件」(群馬県社会運動の歩み(下)「の一部、『労働運動史研究第19号』所収、1960年)

(一) 伊勢崎警察署占領事件

——小林多喜二を迎えての一劇——

昭和六年九月二十五日執行の県会議員改選を前にし

て、群馬県下の町村は騒然としていた。ちょうど晩秋菖が四眠にはいる頃を見はからって、同月十七、八日頃、伊勢崎町の社民党支部を中心とする文化団体では、同町共栄館で文芸講演会を開催する手管になっていた。講師は小林多喜二、中野重治その他二、三であった。社民党といつても実は、日本共産党のフラクション活動を自負するこの地方の若い青年達は、単なる合法的講演会では満足できず、午後一時開会の前に、講師と午饗を共にしながら、中央の情勢を聴きたいというのが狙いであった。その朝菊池盛男(現日共伊勢崎市議)、斎藤力(故人で第二次共産党関係者)の両君は、熊谷駅まで講師団を出迎え、本庄駅まで同乗下車し、駅前から自動車に乗って出発しようとする、かねて警戒中の伊勢崎署のスパイ二名が一緒に乗せてくれとせがむのを、菊池、斎藤両君が当然のことながら、すげなく断わるといふ一幕もあってその日は早くも荒れ模様で空気がであった。

座談会はこの地方の急進分子二〇名ばかりが同志菊池敏清宅に乗って予定通り終了し、昼食も、菊池光好(私の従弟で盛男の兄、現在社会党の幹部)宅の田舎料理に満足して、さて会場に向おうとするところに、トラッ

ク二輛に分乗する警官隊二、三〇名がアゴ紐姿で乗りつけ会場を包圍し、一斉検査の暴挙に出た。無罪集会が検束の理由であった。単に昼食をするのだから、座談会の方は無罪でも大丈夫だろうと甘く見たのが誤算であった。検束された者は講師全部と、小林邦作、菊池盛男、斎藤力、岡田熱、弥勒寺清などこの地方の左翼の札つきと当局がかねても憎しみをもっている連中である。ちょうど一時少し前頃のことである。

一方会場には、『蟹工船』で名を売った小林多喜二と左翼文壇の中堅として活躍していた中野重治がくるというので、聴衆は全県下から集り、開会前から超満員の盛況で開会おそしと待ちわびていた。伊勢崎署としては、なんとかしてその日の講演会をブチ壊し、開会を不能にから講師を釈放する気配がない。それに主催者側はほとんど全員検束されて残った者は当時伊勢崎で印刷所を経営していた吉田庄蔵(のちの湘流社長、同みのよ夫妻だけという始末である。吉田君は何回も壇上に立って事の事情を訴えて開会の遅延を詫言じた。二時になっても、三時になっても、イヤ五時、六時になっても開会ができないが、一人も帰ろうとしない聴衆はようやく殺気立って行った。主催者を責めるのでなく警察への憤しみがだんだん沸騰点に向って上昇していった。ところで、ちょうど選挙運動も白熱化しており、無党派も選挙事務所もっていたから、電話連絡により、この検束騒ぎは、一時聞かぬうちに全県下に知れ渡ってしまった。その重要な電話連絡の任務を果たした人が誰であろう、いま千葉銀行事件で名を売っているレイニーボー社長坂内みのぶ(当時

この資料は本事件を発掘し、全国に知らせた画期的なものです。これに続く同じ筆者の『随筆柿』所収文献により、本事件はより広くより深く追求されました。本文献と『随筆柿』関連文献との間の矛盾は、後者に従って解決されるべきだと思われま

時吉田夫人)その人の若い時代の純粋な姿である。彼女以前私が前編で若い女性グループに「共産党宣言」の講義をしていた時のキャップで非常な優秀な女性であった。彼女のその働きで、この騒ぎを知った県下無罪運動の面々は、純々と伊勢崎に集ってきた。井藤三の石井繁丸(のちの社会党代議士)、連藤可湖(同社会党代議士)、佐田一郎(現佐田建設社長)、堤源次(のちの日共県委員長、坂内一登司(同)等々当時第一線の闘士である。連藤君の如きは勢多郡柏川村の小学校で、興業寮尾池真弓君の応援演説中、この報を得て急遽前陣に引返し、トラックに党員二、三〇名を乗せて駆けつけるといふ難業であった。

この無罪運動の迅速果敢な行動は、選挙運動の監視や演説会の臨検で手薄になっていた警察の虚を衝いたものであった。警察が気づいたときは、伊勢崎の空気はもうどうにも手がくたせないとこまできていた。集った県下の精鋭分子は三〇〇名と号され、腰剣を加えると五〇〇名の大衆が騒ぎ出したのだからたまらない。文芸講演会は官権糾弾演説会に早変わりしてしまっ。そのうちだれか中央の席席から「警察へ押しかけろ」と叫んだ。この一声は全大衆の意志を一瞬にして統一してしまっ。会場から警察までの距離は三〇〇メートルばかりである。「警察、押しかけろ!」「講師を毒遣しろ!」検束者をかえせ!聴衆は口々に叫んで、会場から流れ出、警察へ殺到した。警察はの通報に大あわてにパレードをさすき防備の態勢を整えた。非常招集でかりあつめた地方駐在の警察官がそれでも数十名は特捜していた。警察

の玄関前は俄然修繕場と化した。帽子が奪われ肩章がもぎとられ、なぐられて鼻血を出すもの、駭とばされて倒れる者、警察側は一敗地にまみれ後退した。遂に署長以下全員姿を消すという始末であった。大家側はだれがどこで用意したのか、アンペラを警察の床に敷いて全員座り込み、留置場と内外呼応して革命歌を斉唱するというちよつと想像も及ばない光景を呈した。しかし警察側も漸次陣容を立て直し、逆襲に転じてきた。警察側がこの陣容を立て直した時間は二時間半である。しかしなにしろ警察を占領されているのだから手がつけられない。そこで結局代表団が選ばれ急遽来崎した興業寮長長二郎と交渉の結果妥協が成立して、群衆はひとまず退散することを承認した。代表団は、石井繁丸、坂内一登司、連藤可湖、佐田一郎、波沢広告、堤源次、吉田庄蔵の諸君であった。その条件は

(一) 明朝講師を釈放する
(二) 主催者側は責任者一人を除き全員明日釈放するというのであった。私は、その時の最高責任者というわけに二晩留置されたため、この経緯は後で、右代表団の人々から聴いたものである。私は前後七回検束されているが、留置所の中で革命歌を唱い、うな井をもつていと感涙り御馳走になったのはその時だけである。また私が検束検査されて取調べもうけず調書もとられずに釈放されたのはこれが最初で最後である。いまでも関係者は、「あれが駆けつければ監獄罪で五人や一〇人犠牲者を出したことは、まちがいない」と苦笑している。私が小林多喜二を見たのはその時だけである。

随筆 柿



菊池邦作著

蜚糸網情報社・発行

1967年に発行された菊池邦作『随筆柿』の表紙です。

伊勢崎署占領事件

—小林多喜二の思い出—

私は毎年春三、一五記念日が近づく、必ず小林多喜二のことを思い出し、伊勢崎警察署占領事件を回想する。私は小林多喜二とは一度しか会っていない。だからいま、仮りに多喜二が生きていたとしても、私の顔も、私の名前も、覚えてはいないだろう。しかし多喜二も、あの事件だけは、おそらく忘れてはいないと思う。それは、私達の古い仲間の間で『伊勢崎署占領事件』と呼んでいる戦争前としては、常識上ちょっと想像もできないような珍しい事件だからである。何しろ、警察の不当強圧に激昂した民衆が、警察署を占

領し、署内にアンペラを敷いて、座りこみ、一時は署長以下全署員を、警察の建物外に追い出してしまったという事件である。しかも、それが、満州事変の勃発する直前の昭和六年九月六日の出来事で、天皇制ファシズムが、日本全土に荒れ狂っている最中の事件であるから、戦争前の無産運動に経験をもつ者にとつては、到底信ぜられないであろう。しかし、それが歴史上現実にあったことなのだから、誰だって驚かない筈はない。尤も後で詳しく述べるような事情で、この事件の真相は(警察署占領の事実)は当時の新聞には、一切発表されなかった。ただ警察が、真相をかくすために問題の核心にふれないニュースとして、紳士協約を破って一方的に一部新聞(別項上毛新聞記事参照)に材料を提供した為、可なり事実をゆがめた型では報道されている。だから真相を知っている者は、時の群馬県警察当局とこの事件に参加した関係者だけで、一般には、余り知られていない。私は戦争前、前後七―八回留置所や刑務所に、プチ込まれたが、この時だけは、留置所の中で感涙り散ら

し「うな井をもつてこい」と怒鳴り、留置所の中と外と相呼応して、革命歌を唱い、英雄になったような気分にはたつたものである。このように警察を一時的にせよ占領するという大事件であるにもかかわらず、一人の犠牲者も出さず、ただ一―二回留置所へプチ込まれただけで、誰も取調べもつけず、調査もとられず釈放されたという珍事件でもあった。

昭和六年九月といえは群馬県では四年に一回の県会議員選挙が行われる年で、投票日の二十五日を目標に、保守、革新各派の候補者が出揃い、舌敵の火蓋が切られていた。この日(六日)午後六時から群馬県伊勢崎町南町にある共栄館という集会所で、文芸講演会が開かれることになっていた。主催者は、この地方の革新無産政党を網羅する文化人グループで、講師は小林多喜二、中野重治、村山知義、三好久子その他であった。小林多喜二、中野重治、村山知義といえは、当時日本プロレタリア文壇の最左翼であるナツプ(全日本無産者芸術団体協議会の略称)に属し、その中堅作家として活躍していた。就中小林多喜二は、小説『蟹工船』や『不在地主』で全面的に名声を挙げ、その革

法はプロレタリア文学に新しい時代(社会主義・リアリズム)を画したものとわれ、およそ文学を語る者で、その名を知らない者はいない程有名であった。また三好久子は、築地小劇場の新進として将来を嘱望されていた若い女優であった。

これだけのメンバーが揃ったということは、群馬県下では、未だかつて無かったことであるから、この文芸講演会は、開催日を前にして俄然爆発的人気呼び、前売り券(二十銭)の売れゆき状況から二―三百人はいれぬ共栄館では、おそらく聴衆を収容し切れまいという前景気であった。しかしそれだけ群馬県警察当局にとっては、頭痛の種で、県一郡特高課長以下鳩首、その弾圧方法を考えた、できることなら、これを開催させまいと企んでいたに違いないのである。いよいよその日がきた。果して聴衆は、午前中から詰めかけ、中には遠く高崎、渋川、富岡、藤岡、沼田辺りから舟当持参でこの千歳一週間のナツプ作家の講演を聴こうとするばるやってくる人もあり、定刻の六時前に早くも聴衆は場外に溢れるという盛況であった。

これより先、講師の連絡係りとして、菊池敏男(私の従弟で戦後日本共産党伊勢崎市議となる)菊池敏清(菊池一族の宗家の当主で当時ナツプと関係があり、この同志の紹介で多喜二以下の講師を招聘することが出来た。またその後徳永重、江口漢、鹿地重三氏もこの地に足をいれている)両君が深夜駅まで出迎え、車中で持旗を指していた一行を見つけ、案内して本庄駅に下車したのであった。ところが二人の怪しい男が駅頭で一行を待ちうけていた。埼玉県警察部から派遣された特高刑事である。一行が二台の自動車に分乗すると、くだんの二人のスパイは、図々しくも権力を笠にきて、一人づつその車に乗り込もうとする始末に一行は怒り且つあきれて、当然のことながら、それを峻拒すると二人の特高は、スゴゴと引き下り、ペンを振くなど、早くも小林多喜二一行の身辺には、緊張した空気が醸し出されたのであった。

この日の計画は、まず最初講師一行を、大本家の菊池敏清同志宅に招き、ここでこの地方の尖鋭分子二、三十名だけの内々の集会を開き、茶話会という名目で、小林多喜二から非法法に関する話を聞くことが実は、

私達小数の者のほんとうの狙いであつて、講演会の方ではこれを胡魔化するための煙幕にすぎなかつたのである。そのため文芸講演会の方は、治安警察法に基き、開会24時間前に政治集會届けを伊勢崎警察署長宛提出(開会)しておいたのであるが、モザンこの小集會の方は、お茶を飲み、夕飯をたべるだけというところで胡魔化する方針でいた。また胡魔化するものと甘く考えていたのである。しかしここで私達主催者の大きな誤算があつたのである。中心として見れば小林多喜二の如き著名な日本共産党員を中心とする集會を警察が、それがどんなに小規模集會であろうと、それを眼こぼしする筈はなく、これが公然たる大弾圧の口実になつたものと後になって後悔したものである。

さて一行が、午後一時頃、茶話会々場である菊池敏清宅に到着したので、私達は門の外まで一行を出迎えたのであるが、おどろいたことには一行中築地の女優さん二人の外は、洋服など着ている者はなく、みな無造作な白紺着流し姿で袴などもはいていない者が目についた。九月始めのことでもまだ残暑が厳しい頃であつたから、考えて見れば別に不思議なことでは

ないのである。
 いまでも覚えておられるのは、多喜二が座敷の床柱を背にして、あぐらを掻き火のない大きな火鉢を前にして腕組みをして話をつづける姿である。その顔は赤顔の三二一五記念号などによく出てくるあの写真の顔そっくりで、年よりずつとふけていて、当時とても二十八才の青年には見えなかった。私が養蠶製造業小林邦作という名刺を差し出して、多喜二は興味深そうに私の名刺に見入っていたが、やがて私の顔を見返し、ニコリ笑って名刺を袂に入れた。その時『僕は名刺をもっていないので』と多喜二は云った。

その日多喜二がどんな話をしたか私はすっかり忘れてしまったが敏清同志の記憶によると、『台所と文書』という題であったという。だからその話は、その日多喜二が演壇でしゃべる内容を、そのままさらしたにすぎず、私達が期待した共産党の秘密に属するものではなかったと思われる。また多喜二ほどの人がこんな場所ですんなり冒険をおかす筈はなかった。さて多喜二の話は約一時間位でおわり、外の二人の

作家からも何か話があつてから、午後四時頃一行はすぐ近く七〇米ばかり離れた通泰新殿(しんでん)と呼ばれている菊池盛男宅にゆき、みよりの味噌汁に舌鼓を打って夕飯を食べた。その味噌汁がうまいと云って何はいいも、お代りを重ね大鍋いっぱい平うたという話(盛男の妹はる子の話)が、いまでも同家の語り草になっている。

その日の小集会に出席した人で、現在私の記憶に残っている者は、菊池盛男(前伊勢崎市長)、岡敏清(元一カル紙社長)、渋谷吉吉(伊賀屋、吉田庄蔵(元潮流社長)、斎藤力(故人)、竹内幸作(牛乳販売業)、中野幸一(印刷業)、真下真太郎(飲食業、元読売記者)、赤崎寺清(農業)、岡田三(製菓業)、岡田熟(農業委員)、岡田三(全通所組組長)、島田登司、正金寺忠作(戦後日共境町議)、下田王二等皆私の同志であり、伊勢崎地方の解放運動の先駆者である。一行が、夕食を済ませ、会場に戻つて一ぶくしている、門の外が急に騒しくなつたと思つたところに、二台のトラックが止り、正原正輔(組着刺の武装警官)、三十人がトラックから飛び降り、おなじみ伊勢

崎署の私服特高の指揮の下に、会場めがけて突込んできた。おさまりの大乱斗となり、吉田庄蔵、渋谷吉吉同志、外二一三の同志は免れたが、他は殆ど全部一網打尽にやられてしまった。ただ菊池盛男君だけは、夕食の後片づけで少しくおくれたので、この時は一応検束から免れた。検束の理由は無届集会であった。私はここで始めて、弾圧の理を身と受てまつた自分の不用意と考へが甘まかつたことに気づき地団駄を踏んだが、もう間に合わなかつた。これで当日の演説会は、警察の思つた通り、九分通りはブチ壊された。警察側の勝利が予想された。確かに講演は警察の不当な弾圧によって潰された。しかし大衆は負けなかつた。

検束された私達は、すぐ留置所にブチ込まれたが、何にして人数が多いので警察でも処置に困り、五つ位ある房に押しこんでも収容し切れず、斎藤力君の如き、警察事務室の板敷のまん中に監視つきで座らせるという始末であった。それでも流石に東京からきた講師一行は、保護室に容れて礼をつくした。そういう中で何故か私だけは、ただ一人独房に容れられた。その房は、留置場一番手前の第一号室で、前に容れられ

たことがあり私にとってはなじみの部屋であった。一方演説会場の方は、定刻をすぎても開会にならないので、聴衆の不満はようやく爆発しようとしているとき、講師をふくめ主催者側が総検束されたという第一報がもたらされた。その第一報は、後の潮流社長の吉田庄蔵氏によつてである。続いて、検束の網をくぐり抜けて会場に駆けつけた菊池盛男君が演壇に駆け上り詳しい報告をしよつとすると、これを阻止し、同君を検束するため、五、六人、警官が演壇をとりまく騒ぎに、聴衆は総起となり、『警官が演壇を』、『話を聴け!』、『警官をやつてけ!』など叫ぶ者もあり、この騒ぎの中で菊池同志は

『俺はこれから伊勢崎署に、不当検束されている小林多喜二、中野重治、村山知義の諸生や同志を導還にゆくんだ。自ら進んで警察にゆく俺を検束する必要はない。』と警官の手をふり切りながら叫んだが、遂に捕つてしまふ。伊勢崎署に連行された。共衆館から警察まで二〇〇米位の距離があるが、

時俺は背後で(頭張れ!)と叫ぶ声を聞きながら、警察の玄関に入ったがすぐには、留置所に放りこまれないうで、奴等の監視下におかれた。と盛男同志は当時を回想している。その頃から、伊勢崎署の周辺は、だんだん騒しくなつてきたが、留置所の中からも感ぜられた。留置されていても、それに勢いづいて、足をバタバタして床を踏み鳴らしたり、『早く出せ!』演説会を潰すつもりか?』などと怒鳴つたりした。

私は演説会がどうなつたか、心配でならなかつた。それからどの位の時間がすぎたろうか、外はすっかり暗くなつたようで、夜の闇が深まるに従つて外の様子は、いよいよよたよたなる気が感ぜられた。押しよせた群衆は数人少くとも三、四百人は下らないと思像される大衆のざわめき、怒声、喚声は聞かれた。誰の声は段々留置所に近づくようになって感ぜられた。誰が指揮をとっているのか、相当の圧力を警察当局にかけていることは、たしかである。留置場の入口には一人の番人が、内から鍵をかけ、椅子に腰をかけたてゐるのが、私の房から見えた。何か心なし沈痛の面持ちのもの

よに見える。外に警官の姿は見えなかつた。そのうち、外からよく捕つた革命歌の合唱の音が響いてきた。これを受けて留置所の中からも、期せずして、外の声に合わせて革命歌を唱出した。私も、唱つた。他の房からも力強い革命歌が漏れた。こんなことは、かつて私の経験したことがないことである。留置所の中で革命歌を唱う。しかも大衆と共に!私は、これだけで感激に身がふるえるのを覚えた。外の声はI W・Wの歌に移つた。モチロン、留置所もこれに呼応した。しかし私は感激のあまり、その第一節すら、満足に唱ひ切れなかつた。

あとで判つたことであるが、群衆が革命歌を唱つた時は、かれらが無血警察を占領し、署内に座りこんで、その勝利の感激にひたつた時であつたのである。しかしこの感激はあまり長くは続かなかつた。一旦退いた警察側は陣容を整え泉特高隊長直接指揮のもとに逆襲に転じてきた。それは後年血のメーデーに労働者が皇居前広場を占拠し、喜びに万才を叫んで、はつとひと思つた入註Vの瞬間のように思われる。註1後年筆者は雑誌潮流社の一員として、血のメーデーに

参加し、眼の前でこの光景を見ている。その時、留置場入口の鍵が開いて、一人の金ピカの高級警官が、私の房の前へ近づいてきた。私のよく知っている泉特高隊長であつた。彼は黙つて私の房をのぞいた。これは昔警察の上層部や検事がよくやつたことで、自分でひくくつた者を誇らしげに顧み、ザマを見ろといわねば前に力を見せしめて、留置場のぞきに来たもので戦前前の天馬警官のわるいクセであつた泉特高隊長のぞき込みである。私のいまままでの感激は、いっぺんにフン怒に変わり、留置所から去りゆく、泉特高隊長に向つて

『うな井をもつてこい。何んのための検束だ!』と浴びせかけた。泉はちよつと首を傾けたが、そのまま、出て行つた。泉特高隊長が去つて五分とたたないうちに、警察署の内外は、俄然大騒動がもち上つたように感ぜられた。とにかくどちらかの側か、なだれを打つて相手側に襲いかかつたような気が感ぜられたがそのあとは、喚声と怒号、もみ合い、なぐり合ひの大乱斗となり、修羅場と化したのである。

これは留置所を出てから聞いたことであるが、この大乱斗の中で、警察官の肩章がいくつものもぎとられ、帽子がうらわれという事件が起きた。これは単なる偶然のできごとでなく、いまでも判らないが、誰かすぐれた戦術家がついて、幾人かの人に指令を発し肩章と帽子を奪うことに全力を注がせたに違いないと思われる。もみ合うこと数回で戦いは二時間余でおつた。勝負なしの引き分けであつた。

その夜動員された無産党員の数ほどの位であつたかは留置場の中にいた私には判らない。三百人ともいわれ、四百人ともいわれるが、当夜無産党員の非常勤員の責任を一身に引きうけて、電話連絡に受話機をもちつづけた人が、誰れあろう、後年千葉銀行事件で全国に名を馳せた女傑レインボー主人こと坂内みの女史(当時吉田庄蔵氏夫人)の若き日の姿であつた(註)。尚この日の動員された者の中に喧嘩商賣の香具師五、六人程が潜り込んでいたのを知つていた者ばかり多くなかつたようである。モチロンこれもあとから聞いたことであるが、私の古い同じ茂呂村の同志で当



昭和6年9月8日上毛新聞 夕刊 (200-1参照)

夜大活躍した沢沢広吉といふ非常につき合ひの幅の広い人で、普段から番員と連絡のあった人が、動員したともいわれる。だから例の警官の肩章と帽子に眼をつけたのはこの番員師の団であったかも知れない。また誰か半鐘を鳴らして、この非常事態を町民に知らせたという人もあるがこれは確認されていない。その夜、当時の吉田大のぶ女史の活躍による電話連絡によって非常招集された者の中で指導的役割を果たした主なる人は、石井繁久、弁護士元社会党代表藤野が現在前橋市長、佐田一郎(現佐田建設社長)、遠藤可満(戦後社会党県議員)、坂内一登司(元日共群馬県委員長、源源寿(同上)、の諸氏であった。さてその夜時間が経つにつれて刻々と警官が全県下から非常招集されて、大衆が警察の外に押し出され大乱斗が最終的に収まったのは午前二時頃であったといわれるが、私は昼からの疲れで寝ぎのさい中に寝入ってしまった。その時刻は記憶していない。ただ、何時頃か、うまいカツ丼が留置場に届けられ、生れて始めて留置場で舌鼓を打ったのを覚えてゐる。しかしこれが果して私がウナ井を出せと怒鳴つたため警察で

発したのか、それとも気の利いた同志がいて差し入れてくれたのかは、いまもって判らない。

結果として、警察側は大衆を署から退散させたので物理的には一応勝利を取つたのであるが、帽子や肩章を失つた者や、顔や手足に怪我をした者もあり、仮りに一時的にせよ、大衆に警察を占領されたという弱身があつた。一方大衆側としては小林多喜二など講師以上十数名の人物をとりこむ弱身があつた。どうして、これを警察とせなければならぬと立上つた。とくに東京から来た講師には申取けがいた。それで石井弁護士を筆頭に、遠藤可満、吉田庄藏、沢沢広吉の諸氏が代表で、泉特高課長、伊勢崎署署長に面会し、留置されている者の釈放方を交渉したのは当然であつたが、警察側もこれを渡りに舟と話し合ひに応じ、(尤も話は逆で警察側から妥協をもちかけたという説もある)両者の間に紳士協約が成立した。(吉田、坂内、沢沢氏らの話)その協約は、

- ①この事件の真相(警察占領のこと)は何れの側からも新聞に発表しないこと
- ②犠牲者を出さないこと

③留置されている者をすぐ無条件釈放すること
といわれる(右同上)

その結果であろうか?東京から来た小林多喜二以下の講師は翌朝早く釈放され、私達も地元のものも七日夕刻までに釈放されたが何故か私は二晩留められ、翌々日の昼頃何んの取調べも受けず、調査もとられず、別に理田もなく、ただまんざらと釈放された。私が警察に検査されて、一回の取調べも受けず調査もとられずに、掃きさらされたのは、これが最初で、最後であつた。(昭和21年8月15日作 42年6月補筆)

さてこの事件は、当時から今日まで三十六年の間、関係者(私達仲間)の間では、新聞は何事も「ニュース」として発表されなかつたものと信ぜられていた。それは警察との紳士協約があつたので、誰も新聞などには出ないものと、決めていた為、あまり新聞に注意したものがないなかつたと思われ、そのため事件があつた年も月も記憶してゐる者ではなかつた。私は文芸講演会に前売り券を発行した位であるから講演会開催の記事の「ニュース」は新聞に出ていたに違

いないと思つてつた。見当をつける上で二つが指標になつた。一つは県会議員の選挙運動が行われていたさう中であること。一つは暑い頃であつたといふ私の記憶である。群馬県でははずと前から、県議員の選挙は四年おきの偶数年の九月十五日に行われることとなつてゐた。大正十二年九月私が第一回の群馬共産党事件で検禁された当時も恰度県議員の選挙期間中であつた)そんなと前後の事情から昭和六年以外にないと思つてつけ、本年六月数回前橋図書館にゆき調べた結果上毛新聞に出てゐる別項記事を発見し、問題を突き止めることができたのである。この関係記事は別掲(加P-2加P)のようなものである。モこの関係記事は領の真相にはふれていないが、警察側が自分達の過失(不利な点)をおおいかくすために一方的な発表を行つたことが明かである。

- ① 九月十日の記事で私達を逮捕中とあるが、私は何れも取調べをうけずこれがまず第一のウソであつたことあるが、はねつけられた事実はない。また嘆
- ② 同八日の記事で釈放を陳情嘆願したがはねつけられたとあるが、はねつけられた事実はない。また嘆

3 菊池邦作「伊勢崎署占領事件の真相を語る座談会」所収、1967年)

伊勢崎署占領事件の真相を語る座談会

私は、伊勢崎署占領事件を詳しく就て当時私自身は、小林多喜二以下講師と共に、まさききに検査され、留置場の中にいた。その騒動のファン聞気はよく判つてゐた。その経過については多少とも判らず後日関係者から聞いただけであるのもっとその真相を掴み、できるだけ正確を期したいと思ひ、従弟の菊池盛男君(事件の関係者で前日共伊勢崎市会議員)に依頼し、『伊勢崎署占領事件の真相を語る座談会』を、昭和四十二年八月五日、夜伊勢崎市北千木町の同氏宅(筆者が生れ育つた)で開催してもらつた。集つた者は、同事件の直接関係者で私より二つ年上満七十一才の沢沢広吉氏(当時社会大衆党員)を筆頭に、

願したのではなく、両者共に対等の立場で交渉したのである。
私は、當時を回想し、単なる文芸講演会が何故あんな大きな事件に発展したのか不思議に思つてゐるが、結局それは群馬県の警察部が小林多喜二や中野、村山氏らの影響(即ち日本共産党)を、極度に恐れてゐた為さういふ初めから演説会を潰す計画であつたこと外ならないといふまでも固く信じてゐる。

註①この集会の届出について、真下慎太郎氏は、『菊池君(盛)も斎藤君も成年(満二十才)に達してゐなかつたので僕が届を出したそのためか二百圓か)と語つてゐる。註②坂内みのぶ氏は前橋市の坂内一登司氏の妹で、前橋女学卒業生、昭和四五年の頃同級生四十五人を集めて、共産党発足の研究をつくり、私を講師の講師として、同氏宅の二階で密接に研究をつけたなどの活動家である。尚本報で発表するに当りて、正確を期すため、別掲「伊勢崎署占領事件の真相を語る座談会」を補筆する一方座談会に出張できなかった有力関係者の談話をいただいたので併せて載願したい。 記者

最年少者で当時十六才の少年であつた光山武嘉氏(五十二才)まで、皆六十才以上になつた往年の斗士十三人と傍聴者五名の左記十八人であつた。会は菊池盛男氏が司会者となり、何故小林多喜二、中野重治、村山知義のような人物が地方の小さな一都市にすぎない伊勢崎まで講演にやつてきたかの理由を、当時ナツプの会員であつた菊池敏清氏が説明、そのあと出席した関係者から、事件の真相が語られ、途中中私から、何故こんどの会をもつに至つたかの挨拶と説明があり、引きつづき事件の思い出と質疑がかわされ、午後十時半会を閉じた。

出席者(括弧内は現在の年齢)

- ◎関係者 菊池盛男(57)、菊池敏清(57)、沢沢広吉(70)、沢沢要(61)、竹内幸作(65)、弥勒寺流(65)、弥勒寺撰三(60)、小沢力爾(61)、下田王(61)、岡田宝司(63)、正金寺忠(61)、光山武嘉(52)、菊池邦作(68)

◎傍聴者 星野勤一、早瀬漢、相沢千太郎、小林進、小林恒
私の挨拶「私は、今年の十一月で満六十八才の日本

人の男の平均寿命に達します。そのあとの私の寿命は全くの儲けものでありますが、いまま何時死ぬか判りません。それでいまだ丈夫のうちにも、どうも私が皆さんと一緒にやってきたことやその後が書いてあるものうち、是非、私の気持ちとして後世に遺したいものを、一冊の本にまとめておきたいと思うのです。その中の一つとして、いまま世間に知られていない『伊勢崎署占領事件』をえらんだわけでありませう。あの私はまさきさまに検束されましたので、留置所の中で外の様子や乱斗騒ぎは感じられたのでありませうがその経過については全く判りません。私が活字に遺したものに大々大張りでもあったら後世の人に申訳ありませんので、出来るだけ誤りを少なく、公正を期したいと思ひまして、今晚直想事件に関係された皆さんにお集りをいただき当時の趣意を語っていただいで事件の真相を探りたいと思ひます。どうぞよろしくお願ひ申上げます。

◎司会者のことば(菊池盛男氏)、僕が昭和五年の事件で一年喰らい込み同六年七月に出てきて、二月はかしたすぎた多分九月の六日か七日僕はどうも七日の昏

要請で講師の派遣もカンタンにOKということになったのです。それでさっそく、会場、日時、講師、入場料20銭を劇団んだ前売り券を印刷して準備を進めました。いよいよ当日になったので私と盛男さんと二人で本庄まで出迎えにゆきました。当時はバスがないので武州ハイヤー一台を雇って、本庄駅まで行ったのですが、到着の時間待たせて、ハイヤーを駅前に待機させようという列車に乗り込み、各箱を歩いて講師を見つければいいことになった。何しろ小林にしても中野にしても写真で見えて知っているが本物は見たことがないので、とにかく乗客の顔をしらみ演しに見てある。幸いいくつとも箱を歩かないうちに、ゆかた姿で符棋をさしている一行を見つけたことができたのです。さて一行を案内して本庄駅に下車すると、埼玉県警から派遣された二人のスパイが駅頭に待ちうけて、一寸おいたハイヤーで伊勢崎に向ったわけ。しかしまだ時間が早かったので、ひとまず私の家に小憩してもいい、夕飯を盛男さんの家で用意するまでの間、小林

滝様の晩と思ふんだが、伊勢崎の共栄館で文芸講演を開いたんです。講師は小林多喜二、中野重治、村山知義の外に築地の男女優四人位をええた六〜七人であつたと思う。この文芸講演会が伊勢崎署の計画の大弾圧によつて、講師や主催者側の主催者が検束されてしまつた。そのため集つた聴衆や興下の斗士がおこつて、伊勢崎署に押しかけ、署長以下を追い出し、一時警察署を占領してしまつたという事件です。この事件について、まず最初に、敏清さんから、何故伊勢崎に小林多喜二一行が来るようになったか、またどういう順序で一行を迎え入れたかということについて一応お話し願ひたい。

群馬ナツプの拠点(当時ナツプ会員菊池敏清氏) 当時日本共産党は非合法であつたので日本の左翼文壇は「プロレタリア作家同盟」(一名ナツプ)の下に統一されてしまつた。がその支部組織がこの伊勢崎地方にあり機関紙の戦旗が毎号五十部(最高時一五〇部)もきていたのであります。いわば全国の模範地区今日というモデル地区だつたもんで、はがき一本の

多喜二から、『文学と台所』という話を聞いたことを覚えております。それで、話が終り夕食をすませて、再び私宅まで戻つた時トラック二台で乗りつけた伊勢崎署員に検束されてしまつたのです。

香汗に舌鼓 菊池盛男氏、いまの話の夕飯だが、その時妹がつくった茗荷の味噌汁がうまい、というので、小林多喜二など何杯も重ね、大鍋一ぱいの茗荷汁を全部平げてしまつた話、今でも語り草になつてゐる。それで僕は少し片づけをこして、敏清さんの家に引返し見ると、講師以下全員が検束だといふので、これは大変と、自転車に飛び乗って、共栄館に駆けつけ、壇上に登り、事件を報告しようとしたら、五人の警察官が報告させまいとして、僕を引きずりおろし検束するというさわざです。しかしその中で私は総検の経過を報告したので、聴衆はいかり起ちになつて、官憲の横暴を叫び検束される僕のあとをソソク警察までついて来ましたが、一五〇人位いたで、しゃ。騒ぎはその後とつたのです。

着藤力さんの二階に引揚げ、とにかく講演会は、つづけること、全県下から同志を緊急動員することを決め、すぐ手分けして行動に移つたのです。

私は共栄館に帰つて、講演の方を担当することにしました。しかし開会でも、出る者は片ばかりから中止で、仕方なしに私も壇上に乗つて三好十郎の『棺の後から』という詩の朗読を始めたところ、これも中止というわけ。そこで私は、そんなバカなことがあるか、この本は、本屋で売つているものだど抵抗した。結局引つりおろされてしまつた。それからいふ参議院議員の選挙に自民党公認として立候補している佐田一郎さんなども馳つけ、演舌口調で始めたのですがこれも中止になってしまつたのです。そのあと私は、波沢広吉さんと、二人でハイヤーで強戸へ同志の動員に行きましたが、強戸では遂に一人も来てくれなかつた。大乱斗はそのあとで起つたのです。警察の前には、皆警電池でしたから、これを皆で全部つづけばなしにしてしまつたのです。一度にパツと電燈がつかました。しかしそれがだんだん光りが細くなって行

いかつた。それで大乱斗になつた。その時はこつちが七八十人位いたと思ふ。十一時頃から二時頃までやり合つた。さいごに僕と石井弁護士(いまの前橋市長)と吉田さん(後の潮流社長)の三人が代表にえらばれ、泉特高課長と会見全員釈放を要求した。しかし警察側は、逆に全員を撤去を求めてきた。しかし警察としては、一時的にせよ、署員全員が職場を放棄したという弱身があるので、さいごに妥協が成立した。①全員翌朝までに釈放された。②この事件で犠牲者を出さない。③新聞に出さないの三項が条件であつた。とにかく、奴等職場を放棄したこととどうして強く出られなかつたようだ。

尚弥勒寺演、下田王二、小沢力爾、正金寺忠作の諸氏からもそれぞれ発表があり、ついで質疑にはいつた。

質疑応答

菊池一 あの乱斗の最中半鐘をたたいた者がいると伝えられているが、この点の真相は、どうなんですか？ 弥勒寺(撰)―それは斎藤力君の家に集つた際、突際出た話で、半鐘を打つて事件を世間に知らせ大事件

つたのを覚えています。大乱斗が一応おさまつた後同志は再び斎藤力さん(故人)の二階に集つて今後のことを話し合いソッパを食べて別れました。二時頃だつたでしょう。

警察官の横ピンを擲つた三好久子、岡田宝司(63)氏 さつき戦旗の話が出たが僕は当時戦旗の配付を手伝つていたが、伊勢崎支部の勢力範囲は東は太田から西は駒形までであつた。それからあの乱斗の際、僕は築地の女優三好久子(いまNHKの旅館に出てくる)と一緒にいたのですが、彼女の勇敢にはおどろいたね。警察官の横つららを、と擲りつけたんだ。とにかく勇敢だけ、十九才位で綺麗な女優さんだつた。署長の椅子を占領 波沢広吉(70)氏はじめこつちの勢力が圧倒的に強かつたので、署員全部姿を消してしまひ、警察はカラツクになつた。署長もモテロソソない。そこで僕が一時署長になつたもの云つて、署長の椅子に腰をかけ、大いに気をよくしたものである。その時外の者は、警察の事務室にむしりを引いてすわりこんでいた。ところが、それからしばらくすると泉特高課長が警察官の一隊を引きつけて、われわれに襲

菊池一 あの事件に香具師(やし)が参加したという説がありますが、この事実はありますか？ 菊池(盛)―同志のうちにかつて、やくざであつたもの(特に名を秘す―盛男)もいたので、そういう連中が知り合ひの香具師を動員したということもあり得ると思ふ。

菊池(邦)―警察官の中に帽子や肩章をもちとられた者がいたという説はどうですか、それからケガ人が相当出たともいわれるが？ 菊池(盛)―帽子と肩章については確認できないが、乱斗は僕がまだ留置場へ入れられない時なので、特高課長のキンタマを奪って僕が突きとばした事実はある。また重傷者は出なかつたが両方に、パンソウ膏位いの軽傷者が出たことはたしかだ。

菊池(邦)―光山さんの家に保管してあつたという前売り券とあれが事実と判明するのですが、あの事件の日付けですね、上毛新聞によると昭和六年の九月

六日になっております。しかし新聞はその日連取（高宮村）の尾内航空兵の葬式を写真入りで伝えています。しかし、あの日は僕が、白紙の弔辞を読んで問題を起した日、果して講演会と同じ日であったでしょうか？

竹内（一）それはちがう、僕もあの葬式には行っていないので同じ日とは思わない。（外に同じ意見多数）

菊池（一）僕は呑竜様の晩と記憶している。

菊池（邦）一前売り券は何枚位発行しました。横書きですか、縦書きですかまたその大きさは？

菊池（一）三百五十枚刷り、全部出ました。形はたん冊方で、縦書きです。縦が六寸、横が二寸五分位、入場料は二十銭でした。

光山一約束しておいた当日の前売り入場券が遂に発見できないで申しわけありません。たしかに二一三年前まで、日本資本主義発達史講座の中に挟んであったのを確認しているんですが、その本がどこへ行ったか見つからないのです。

竹内一僕は当日木戸番の責任者だったので、二百五十枚位はあつりました。

り、私の希望で九、二二事件（本書実録挿入）でくる事件）につき、思い出を聞いたところ菊池盛男氏から検挙の朝、逃走し、約一ヶ月の間、東のあみだ（地名）の桑原の中にひそみ、家人から食物を運んでもらって生きぬいた劇的な話などあり、非常におもしろかったが、それは後日のたのしみに残しておくことにしよう。

なお座談会には出席しなかったが、事件に重要な役割を演じた左記各氏の談話をつけ加えます。

力関係を見る 吉田（元）（元潮流社長）談

座談会がおつたので、参加者三々五々会場（菊池徹清氏宅）から、帰りがけの時二一三台のトラクタが、会場めがけて、やってきました。その時菊池（邦）さんは立小便をしていたのを覚えてます。僕は、これはたまたまでないと直感し、座談会に出席した女の人二三人をつれて、菊池（一）さんの西南に

ある桑畑に導き、コソコソ逃がして、オートバイを押して、一旦自宅に帰り、重大性を感知して、前橋の社大党の選挙事務所、事件を急報し、県下から同志を動員するよう要請しました。それから共乗船に行

菊池（邦）一あの時動員された大衆は、二一三百人位という人もいます、その点はどうですか？また留置所の中と外と相呼応して革命歌を合唱した氣勢が最高潮に達した時の一番多かった時の人数は？

沢沢（一）一それは動員できなかった。頼みにした強戸が一人も来なかった。大乱斗の時七、八十人位と思う。しかし出たりはいつたりしたし、あとからもきたので延の動員数は相当多かった。

菊池（邦）一それから講師側であるが上毛新聞には小林多喜二、中野重治、村山知義の三人の名前と築地の女優一人（これは三好久子さんのことですが）となつております。

下田一鹿地巨もいたのではないか。

菊池（一）鹿地が来たのは、そのあとだ。江口漢もきたが、これも別で時がちがう。

赤助（一）鹿地が来た時、剛志駅まで向いにゆき、二人で自転車に乗ってきたが、砂利に自転車の輪をとられ、二人が県道に投げ出されたのを覚えていて。だから鹿地はあの占領事件の時ではない。

以上でいただきたい伊勢崎署の占領事件の座談会をおわ

つて残った同志と相談の結果、講師は総核されてしまつて若干おくれたが、講演会だけはやることに決めた。事件の全貌を報告して諒解を求めた上、開会したのであります。しかし、鹿地の警察官は演壇に登る者は片ぱりから、中止を命じ、十三人位の弁士全部が、中止されたので、聴衆が怒つてしまひ総核になり、講師を返せと迫り警察官と対峙する結果です。そこで私共は薬屋に引きあげ、相談の結果今夜十二時を期して、伊勢崎署を襲撃することと、大衆の動員、その他の手筈も決め、必要の場合は、警察の電話線を切断したり、半鐘を乱打することとそれぞれ役割を決めて、待機の姿勢にはいつたのです。そこへ新聞記者が四一五人やつてきて、『今夜の結末をどうつけるの』と質問を乱発するので、僕は、『今夜はこれ以上抵抗してもしょうがないから、皆それぞれ家に帰つて寝る。対策は明日だ』と偽つて新聞記者を帰したのです。

さて警察での乱斗はそれから二時間後経て十一時半頃からでしょうか？それまでにこっちの力に押されて警官は全部署内から姿を消したので、仮庁舎の事務室

を片づけ机や椅子は庭へ担ぎ出し物置から箆を引っ張り出して広くなった事務室に一同が座りこんだわけです。また庭にあつた警察の自転車は片ぱりから、前の川に投げこむなど氣勢を挙げる連中もあり、かれこれ二一三百人の大衆が、警察の外に押しよせていました。そのうちに警察側も緊急手配によつて一五〇人位の警官を動員し逆襲してきたのです。勢いの超くとこ、大乱斗となつたのですが、力関係で警察側は大衆に押し負けました。そのような対立状態が午前一時半まで位つづき、結局警察側、このままで押し切れないと見てとつたか、一応手を引いて、警察の裏側に退いたのです。そこでこっちは鹿地でなく講師や検束者を釈放させることであるからというので石井弁護士と僕が代表にえらばれ、泉特高課長、伊勢崎署長と会見し、事態の収拾について相談しました。しかしささいしは先方も、いろいろおどかしをかけたので、その都度大衆側に報告すると『代表は弱腰でダメだ。もっと確り交渉しろ』などとハッパをかけられ、さいごに先方から今夜の事件を公にしない（新聞記者に話

を片づけ机や椅子は庭へ担ぎ出し物置から箆を引っ張り出して広くなった事務室に一同が座りこんだわけです。また庭にあつた警察の自転車は片ぱりから、前の川に投げこむなど氣勢を挙げる連中もあり、かれこれ二一三百人の大衆が、警察の外に押しよせていました。そのうちに警察側も緊急手配によつて一五〇人位の警官を動員し逆襲してきたのです。勢いの超くとこ、大乱斗となつたのですが、力関係で警察側は大衆に押し負けました。そのような対立状態が午前一時半まで位つづき、結局警察側、このままで押し切れないと見てとつたか、一応手を引いて、警察の裏側に退いたのです。そこでこっちは鹿地でなく講師や検束者を釈放させることであるからというので石井弁護士と僕が代表にえらばれ、泉特高課長、伊勢崎署長と会見し、事態の収拾について相談しました。しかしささいしは先方も、いろいろおどかしをかけたので、その都度大衆側に報告すると『代表は弱腰でダメだ。もっと確り交渉しろ』などとハッパをかけられ、さいごに先方から今夜の事件を公にしない（新聞記者に話

はす々その乱斗の中にとび込んだが、そのとき、二人の巡査が帽子をとられ、誰がとつたのかその帽子を、警察前を流れている小川に投げ込むのを見た。乱斗は可なり、長く続いた。午前一時頃、泉特高課長が、警察の奥の小使部屋に僕を呼んで『速速君見たところ君が最年長者のようにだ、当局は君を首謀者と見なす。君が責任者として検束するぞ』とおどかしやがった。そこで僕は、『よろしい。それでは即時全員を釈放しろ。そうすれば責任をもつ』と押し問答したが、その段階では、まだ釈放するとは泉の野郎、どうしても言わなかった。その夜の動員数であるが、後から駆けつけた者は別として大乱斗の時は七、八十人は下らなかつた。前橋だけでも三十人行つた。尤もこの中に大胡の連中もいた。

普通なら騒擾罪 坂内一登司(67)氏(元日共群馬県委員長)談
とにかくあれだけの重大事件であるから、当時の普通の考え方からすれば、騒擾罪が成立して五人や十人はひつくりられたのに相違ない。民衆側では半鐘を鳴ら

さなり)という条件を容れれば夜が明けけるまでに全員を釈放する。従つて一人も犠牲者を出さないということとを申出して来たので、こつちもおとなしく引き揚げることを承認し、妥協が成立したのです。恰度午前二時頃で知りませう。とにかく僕は力関係というものを、こつちの力が大きく、先方に落度（責任と体面）があれば、その非法も合法的になるというつもりで、まあ以上がだいたい経過です。

俺だけで三十人動員 遠藤可満氏(66)(戦後社会党員)談
あれは恰度俺が三十才の血氣盛りの時で、たしか昭和六年九月の県会議員選挙のまっさい中のことであつた。尾池君が勢多郡から立候補していたので夜十時頃であつたと思うが、大胡の演説会をおえて、事務所深夜食を喰つていると伊勢崎から大事件だという電話がはいつたので、僕が総指揮をとり居合せた者市内の者を至急動員し三十人ばかりをトラックに乗せ沢山の鐘も用意して現状に駆けつけた。その時は十一時半頃だつたと思う。その時は警察の前は大乱斗のさい中で、僕

した者もあるという程で両者それぞれ二百人位を動員し相対時しての大乱斗で、とにかく一時民衆が警察を占領し警察官が署内に一人もいなくなつたのだからな。尤もこつちにはこのことが幸ひして犠牲者一人も出さずに済んだわけだ。当夜活躍したのは石井弁護士(現前橋市長一記者)、佐田一郎(佐田建設社長一記者)、吉田君(潮流社長)、遠藤君、堤、盛などだ。朝の二時頃になつて泉とこつちの代表との妥協が成立して、事件は収つた。その時の民衆側の代表は、石井君、吉田君、それに遠藤君であつたか、誰であつたかよく覚えていないが三十四人位であつたと思う。

なお、吉田氏(元潮流社長)に私が『坂内君などは普通なら騒擾罪の成立も必至で、十人位の犠牲者がでるところであつた』と云つていますがと聞くと吉田氏は次のように答へた。
『私は翌日、全員釈放をたしかめるために、伊勢崎署に行つたところ、十二三人の警官が、包帯をしたり、パンツ膏を張つたりして、前夜の乱斗の激しさを話していた関係から、公務執行妨害、傷害、器物破

破、家宅侵入はモーション、騒擾罪など五つか六つの罪名が一纏に着せられたのではなかと考えてます』と強硬罪の可能性を示唆した。

晩秋二眠のとき 木暮はの子氏(菊池盛男氏の妹) 恰度晩秋蚤が二眠にはいったときだったからよく覚えていいます。小林多喜二行がくるというので、朝から家の中で待っていました。しかし何を走らしたらいとかというので、うち中で相談した結果、田舎のことだから、若荷汁の卵とじがよからうということに決り、わたしが東の畑から、若荷を二つかみばかし、とってきて、大鍋を洗い用意して待っていました。その内に一時間になって本家の敏清さんのうちへ一行が到着したという知らせがあったので、夕飯の用意にとりかかったのです。小林多喜二の話が終って、三時頃女優さん二人をふくめ七七八八の一行が、家の奥の座敷へドヤドヤと上り、しばらく待って貰って早夕飯をたべたのです。その時小林多喜二は白い餅の着物を着ておりましたが背の高いヤセ型の人でした。若荷汁がうまいと喜び二杯たべ、わたしに、向って『この辺では若荷が沢山獲れるのですか?』と聞くから、わたしは

「たべ切れない程とれます」と云いましたら多喜二は「田舎はいいですね」と云って笑ったのが忘れられません。検査は一行が敏清さんの家に引揚けたすぐ後だったのです。

参考新聞記事

ナツプ作家数名

伊勢崎署に検束される

無産党有志主催の講演会を前に

署では理由を厳秘

伊勢崎町無産党青年有志主催プロ作家芸芸講演会は、六日午後七時頃伊勢崎町共栄館において開会されたが、此より先弁士として東京より村山知義、小林多喜二、中野重治三氏外ナツプ作家男女三名は、自動車であつた。労働大衆党伊勢崎支部員小林邦作、斎藤力、菊池利義(敏清の誤り筆名)の諸氏と共に佐波郡茂呂村大字下茂呂支部員菊池盛男方で晩餐を取り、午後六時会場に赴かんとした際、自動車二台で乗込ん

丸氏外代表者数名は三度び伊勢崎署に出頭釈放方を陳情した。(同上)

検束者は

既に東京に送還

党員も夕刻までに釈放

ナツプ作家検束騒ぎ

(夕刊所報) 東京から来たナツプ作家小林多喜二(外数名及び佐波郡無産党員小林邦作氏外数名)の検束騒ぎについて、その理由は伊勢崎署で絶対秘密に附しているのだから、尚七日朝八時頃石井繁丸外代表が釈放願ひに出頭する前自動車で本庄町に送り、東京に帰還釈放したものと解される。尚部内党員はおそくとも正午までに釈放される模様である。

伊勢崎署検挙者八日釈放

既報伊勢崎署に検挙された佐波郡無産党員小林邦作

氏外五名は取調中であつたが、八日夜、いずれも釈放された。(同年九月十日上海新聞夕刊)

4 新資料 菊池邦作「著者略歴」(『徴兵忌避の研究』1977年)

【著者略歴】

1899年群馬県伊勢崎市に生まる。東京高等蚕糸学校卒業。1922年建設者同盟に加盟、全国学生連合会結成に参画。1923年群馬共産党事件に連座起訴される。1931年小林多喜二、村山知義らと伊勢崎警察署に検束され、同署占領事件で検挙され起訴留保(非転向)。敗戦後潮流社編集局(経済学全集を担当)を経て1956年に蚕糸絹情報報を創刊し今日に至る。主な著書「無産党の話」「柿」「ソ連ヨーロッパの旅」など。

上が「徴兵忌避の研究」の「著者略歴」です。本事件のことが出ています。早瀬演さんのご教示です。左は「随筆柿」の「著者略歴」です。東京高等蚕糸学校は現在の東京農工大学です。



菊池邦作さんと娘の知子さん、1950年 (平山知子『若きちひろへの旅・上』より転載)

著者略歴

明治三十二年十一月群馬県伊勢崎市に生る。幼年時代は両親と死生別し、孤児となる。姉兄と共に叔父に養育され成人す。大正十一年東京高等蚕糸学校を卒業、各種雑誌に従事。学生時代から社会主義運動に投じ、建設者同盟、学生連合会に加盟。大正十二年関東大震災に相遭、群馬共産党事件に連座、検挙され、執行猶予となる。昭和七年九月九・二二事件(第三次共産党再建運動)で検挙(八回目)されたが起訴留保となる。戦後長野県下で日本共産党再建運動に従事しつつ、GHQと連絡し、日本民主化運動に挺身、その後GHQの反動あり、主として経済学全集の編集に従う。現在業界紙「蚕糸絹情報」主筆。昭和三十九年国際労働大会出席の途次、約五十日間ソ連・ヨーロッパを旅行。この間雑誌、新聞の発行、国会議員秘書、行商、露店商など戦後の混乱期を遍歴す。

著書並論文

無産党の話(上海新報の連載記事をまとめたもの) 戦争責任の追究(戦後日本民主化のためNHKから放

送したもの)、ソ連ヨーロッパの旅、(一九六五年自費出版) 治安維持法を徹廃せよ(一九一九年上海大衆、大逆事件秘話(一九五六年歴史評論、群馬社会運動の歩み(一九五九年労働運動研究)、天皇制下における異議(一九六四年)す)

菊池邦作選集に就て

私は本「柿」を第一集とし、左記のとおり菊池邦作選集の出版を二年一冊位の予定で計画しております。

第一集(隨筆秘話)

大逆事件秘話、群馬社会運動の歩み、憲兵忌避の話、天皇制下の異議(兵士の反抗と叛乱)

第二集(思想)

上海新聞論説「上毛大衆」、宣言の諸論文「蚕糸絹情報」「市民として」、「近頃思ふこと」などの集録

第三集(蚕糸)

一四娘(蚕糸絹情報の座談会を録したものの)、第一の価格等(蚕糸絹情報の主張を集録したもの)

第四集(小説)

蚕助爺さん物語り、蛇田、健さんと女傑、くぐり、銀座の新天地その他

だ伊勢崎署員に前記十名全部検束されたので菊池盛男氏外支部員代表は、同署に検束理由を質しに赴いた所同氏も検束される騒ぎあり、県特高課員数名総動員の活動で同署は、ものものしい緊張を呈した。之れが為講演会には弁士が骨抜きとなり、支部員一同は狼狽し、二百余名の聴衆の為、間に合せ弁士を充て講演会をつづけ、同十時半頃閉会した。尚検束理由は伊勢崎署では絶対に秘密にしている。

(昭和六年九月八日上海新聞夕刊トッパ記事)

代表者が伊勢崎署に出頭

釈放方を陳情す

別項ナツプ作家六名と労働大衆党伊勢崎支部員五名検束に依り、支部員は急遽前橋本部に報告と同時に応援を求め同夜石井繁丸、進藤可満両氏を始め十数名自動車で駆けつけ、これに合体した支部員五十余名は、再び伊勢崎署に出頭し検束理由を質し、これが釈放方を嘆願したがはねつけられ、七日午前二時頃まで頭張りつづけたが、同署では又も検束の態度に出た為、己むなく引上げ、善後策を協議し、同日午前八時石井繁

5 新資料 村山知義「多喜二の思い出」(「東京芸術劇場公演パンフレット」所収、1968年)

①多喜二は一九〇三年の生まれだから私より二つも若い。だのに一九三〇年末に小樽から出てきた彼は、既に銀行員としての体験や、労働運動の経験を持ち、東京で芸術運動ばかりしていた私などより、遙かに実際の生活と闘争を知っていた。当時私は上落合に住んでおり、そこには作家同盟の事務所もあったので、彼はよく私の家へも遊びに来た。彼は真面目で、謙遜で、人のいうことをよく聞いた。同時に、自分の主張を熱烈に主張した。よく大声で、無邪気に笑い、率直だった。そういう性質なので、私よりも私の妻(童話作家の壽子【かずこ】)とよく気が合い、私より彼女と話している方が多かった。彼女も率直で、無邪気でユーモラスで、よく笑い、気の合った人とオシャベリするのが大好きだったのだ。私の留守のうち、彼女は非法法だった多喜二のレポーター(連絡員)をつとめていたらしい。一九三〇年五月初めから十二月末まで、私は刑務所に行った。そして翌々三三年四月初め、私はまた刑務所にはいり、翌三三年十二月の末までそこにいた。一方、多喜二は一九三三年三月以後、非法法の生活にはいり、私が獄中にいた三三年二月二十日には逮捕され、その日の夕方には虐殺されたのだから、私が娑婆(しや



の思い出
 多喜二は一九〇三年の生まれだから私より二つも若い。だのに一九三〇年末に小樽から出てきた彼は、既に銀行員としての体験や、労働運動の経験を持ち、東京で芸術運動ばかりしていた私などより、遙かに実際の生活と闘争を知っていた。当時私は上落合に住んでおり、そこには作家同盟の事務所もあったので、彼はよく私の家へも遊びに来た。彼は真面目で、謙遜で、人のいうことをよく聞いた。同時に、自分の主張を熱烈に主張した。よく大声で、無邪気に笑い、率直だった。そういう性質なので、私よりも私の妻(童話作家の壽子【かずこ】)とよく気が合い、私より彼女と話している方が多かった。彼女も率直で、無邪気でユーモラスで、よく笑い、気の合った人とオシャベリするのが大好きだったのだ。私の留守のうち、彼女は非法法だった多喜二のレポーター(連絡員)をつとめていたらしい。一九三〇年五月初めから十二月末まで、私は刑務所に行った。そして翌々三三年四月初め、私はまた刑務所にはいり、翌三三年十二月の末までそこにいた。一方、多喜二は一九三三年三月以後、非法法の生活にはいり、私が獄中にいた三三年二月二十日には逮捕され、その日の夕方には虐殺されたのだから、私が娑婆(しや

ば)にいて、彼と接触できた時期は、一九三一年一月末から三二年三月までの、ほんの一年二ヶ月に過ぎない。彼は全くオシャレがなく、いつもヨレヨレの日本着物に着古した二重廻しを着て、風を突っ切って歩いていて、しかし非法法になってからは変装する必要があるので、私が出所して見ると、私の一張羅の洋服もオパーも、妻が多喜二にやってしまっていた。

②一九三一年の春秋だっただろう。左翼劇場の芝居を前橋、高崎地方へ持っていくことになり、朝、一同上野駅から立った。芝居の幕開き前に講演する筈の多喜二と中野重治も同行した。ところが上野を出て暫くすると、或る駅から主催者の農民組合の人が乗り込んで来て、前橋の駅には警官が出ていて全員逮捕する手筈になっていたから、途中でおりてくれ、という。途中の或る駅でおりて、組合員の可成り大きな農家に行き、仕方ないからそこで芝居をやる、ということになり、組合員を召集し初めたところへ、早くも察知した警官隊が襲ってきて、全員つかまえられてしまい、劇団員はそのまま上野へ追い返されたが、小林、中野と私は前橋につれていかれ、警察の留置場へほうり込まれた。コンクリートの地下室に丸太で囲んだ、猿の檻のような所だ。既に夕方である。多喜二は一刻も黙っていない。

「署長を出せ!何で俺たちをこんな所に入れた?」
 「署長はもう官舎へ帰った。」と巡査がいう。
 「それなら官舎へ行つて連れて来い。そんな無責任なことがあるか?」
 と、多喜二は丸太を叩き、床を踏み鳴らし、あばれる。中野と私もやるが、到底多喜二には及ばない。とうとう、一時間あまりで、巡査も持てあまして、署長に相談して、私たちを釈放してしまつた。

本資料は、白樺文学館の佐藤三郎さんが発掘されたものです。蛸崎澄子さん・藤田廣登さんから紹介を受けました。

③一九三三年の二月二十一日、私は豊多摩刑務所の庭へ運動に出た。政治犯はみな独房で、監房から一步でも外に出る時は深編笠をかぶせられ、運動場も扇形の場所をコンクリートの高い壁でいくつにも区切つた狭く細い空間で、一人切りでトクトコ走り廻るだけのことである。その朝、私の所へ赤い花の鉢植えが差し入れられた。運動場の途中、二階建赤煉瓦のズラツと並んだ窓のあちこちに同じような赤い花の鉢植えが見える。ハテ、どうしたことだろう、と思つていると、やがて妻が面会に来た。小さな面会室にテーブルをへだてて相対し、間に巡査がいて、会話の内容をノートする。八分程の面会時間の間に、いろいろ(家事以外のことをいうと面会中止にされる)を洩れなくいわねばならないので、彼女は紙石盤(しせきばん)書きの項目を書いて来て、それを目の前に立てながら急いでしゃべる。その両手で支えて立てている紙石盤の私の方に向いたところを見ると、チヨークで「キノウ、タキジ、コロサレタ」と書いてあった。赤い花はそのためだったのだ。多喜二は小樽で書き初めてから、たつた、五、六年の作家生活の間に、あれほど多くのすぐれた作品を書いた。しかもそれは、当面の一番大事な、一番基本的な問題を、その内容にふさわしい形式を求めながら、一作は一作へと、自分自身に対する要求を高め、強めながら書いた。この使命感と、氣迫と、勇氣とは、われわれが絶対に多喜二から学ばねばならぬものだ。「蟹工船」で多喜二は、日本文学で初めて、極限の状況の中の労働者を、階級として描き、また初めて、軍隊が資本家のものであることを堂々と描いたのだ。(一九六八年、初演パンフレットより転載)【三段落にしました。】

小作農民運動から共産党へ(その三)

団体協議会と伊勢崎警察署事件

堤 源 寿

この頃群馬の左翼系の活動家は頻りに会議をもった。団体協議会もその一つである。前橋市の馬場川ぞいの角田儀平治氏の知り合の家で第一回の協議会を開いた。文化団体の遠藤一郎、モッポルの角田儀平治、全協系の泉や吉田鶴喜、全国会議派の堤、福田など、他にも参加者が居たと思うがはっきり氏名を憶えていない。会議は所属団体の現状を話し合い、今後どう活用するかを話し合っ、次回を何日やるかを決めて別れたと思ふ。第二回の会議は、国領町のラムネ屋の息子に好意を持ってくれた運動を支持してくれる仲間をラムネ屋き場になっていた倉庫を借りてやる事になっていたため、そこへ集まった。



堤源寿さんと佐藤正二さん
(『月刊不屈ぐんま版』第2号より)

いた仲間がかけこんで来て、伊勢崎で文化講演に来た小林多喜二と伊勢崎の仲間が警察に検束されたのでこれを取り戻すのに動員してくれと要請があったから、行くよかと云って来た。誰からの話しかと聞くと言った。遠藤氏から話があり、もう遠藤氏はトラック一台仲間を連れて行った、と言ふこと「それは大変だ、俺達も行く」と云う事になったが、どうして行くが金を出すからタクシーで行こうという事になった。遠藤一郎君が俺が金を出すからタクシーで行くという事になった。署の呼んで伊勢崎署に行った。署の受けの所に坂内一登司氏が一人居た。他の人達は聞いていたら今釈放要求の交渉に入っているといふ、君達が来てくれた百人力だと喜んで。警察の玄関には警官は一人も居ない。我々は大声ですぐ釈放しろと叫んで氣勢を上げた。



富沢実さん
(『月刊不屈ぐんま版』第3号より)

時間が経つにしたがつて仲間の人数が増して、もう五、六十人になったのでますます氣勢が上がり警官もどうにもならなくなった。我々もどうでもならなくなった。我々はんだので、交渉の様子を聞かせるか、一応しらべて釈放するといふので即時出すことで交渉しているといふ報告した。「それは、駄目だ、何にもしてない人達を連れて来てしらべるとは何んたる事だ、即時出す様強く要求しろ」といつてやっつた。ますます仲間の人数は多くなって来た。警察も玄関から受付まで占領されているので体面を考えたのが、二、三の警官がバケツに水を汲んで来て、受付の広場に流した。水が流されたので一時外に出たが、警官が玄関を閉めるのかと言いつつながら再びなかへ踏み入ってしまった。この間に県特高課長と警官を動員してきたが、どうにもならなかつた。遂に夜が明けたらすぐ釈放するということを交渉団が言つて来た。それで我々は釈放はあたりまえで、今日の事については一人も取りしらべや犠牲者を出さない事を約束させろと要求した。警察は今日の事はなかつたことにするというので、気負いした



人達もそれならよからうというので解散した。私と福田と遠藤一郎の三人は夜明けに出すといつてもほんとうかどうかかわからないから釈放を確めようといつて伊勢崎の斉藤力君の家泊つて交番で警察へ行つて見張つていた。夜がまだ明けきらない薄闇内に自動車を送り出したと斉藤君が確めて来たので、斉藤君の家で朝食を馳走になつて帰つて来た。こうして犠牲者も出さずに釈放を勝ち取つた。

() は講演者の発音です。【 】 は筆者の注です。

只今ご紹介にあずかりました菊池敏清です。菊池が色々出てきますから混同されませんように。

さて、只今富沢さんから非常に、この歴史的ないろんな大事なお話を承つて、大変参考になったと思われまふ。私の話す事は「ありし日の小林多喜二」っていうのは、これは主催者がつけてくれたんで、どういうことを、どうに話せば良いのか迷つておりましたので、皆さんが気に入るようなあれ【話】はないかも知れませんが、ま、一つ聞いてみて下さい。富沢さんは、あの昭和6年9月6日の文芸講演会、小林多喜二を中心とした文芸講演会を主として色々お話しいただきました。その当時はまだ我々も若くて、小林もこの年は28歳ですかな。作品は色々「三一五」(さんいちご)【一九二八年三月十五日】とか「党生活者」とか、一番有名なのが「蟹工船」。これらが出ておりました。当時の本を見ると、あきれることにみんな罰点(ばつてん)【×のこと、伏せ字】ばかりが、印刷してある。つまり削除された訳なんです。それでもまあ意味が通じるんですが……。

さて、小林多喜二という、非常に若い青年で立派な文章で小説を書いてくれたということでありますが、この方は東北の秋田県の出身です。秋田の日本海側に能代という町があります。あれから川が東に延びている。その川の北側(きつつかわ)、青森県側に生まれた、育つた家がございませう。訪ねてみました。【その頃は】まだお母さんが丈夫だった。その後、こういうような、色んな小説を書くのにどうしたかと思つて、調べたところが、北海道に渡つてますね。で、函館、札幌ではなくて小樽で大変時間を過ごしているわけですね。この時に「蟹工船」の材料や「三一五」(さんいちご)の材料などを得られたんじゃないかと思ひます。

さて、どうして私どもこの伊勢崎に来てくれたかというこ

とですが、この前【富沢さんの話】にもありましたが、ナツプという団体、無産者文芸団体ですが、それが「戦旗」という機関誌を発行していた。戦いの旗ですね。「戦旗」、まるで共産党の機関誌みたいな題ですけど、内容は違う。内容は小説なんです。いわゆるあの、さつきもこちら【富沢さん】がおっしゃったように、いわゆる、あの当時は、無産者ナントカというのとはやりで、それを使っていました。さて、そこで、その「戦旗」という機関誌が発行されますと、この辺でもそれを取って読んでくださる方が多かったです。つまり、その当時で見ると、群馬県だけでなく、日本中（にっぽんじゅう）で一番しっかりした支部がここ【茂呂】に出来たんだと私は思っています。とにかくできる時には五十部くらい、入ったもんです。こんな所はめったになかったです。ところで、小林さんがちょうどそのナツプの方の、東京の幹部だもんだから「へー群馬県にはえれーん【偉い】がいるもんだなあ、こんな事を一生懸命やってくれている。」というのが頭にあったようです。それがなければ、我々が来て下さいと言ったってなかなか来やしません。

それで、それから連絡すると、よろしい、行ってやろうと。それで、村山知義、中野重治それに今の小林多喜二、富沢さんによると女優さんは三好久子じゃないとおっしゃっていますが、これはわかりません。当時の記録を見ると「キヨスミスミコ」という人も来ているようです。二人でおいでのようです。

さて、当時はちょうど県会議員の選挙があつて、四年に一回のやつですね。それで、警察の力がそっちに取られたんだというけど、それはわかりじゃない。つまり、そういうふうに入が集まってる色々無産党の県会議員の話をやっているから、レベルが上がってきている訳ですね。そこへ我々の方で東京のナツプの本部の方へ、一度文芸講演会行って、来てくれないかと頼んだところが、うわあめずらしいや、行ってやろう。それはありがたい、ぜひお願いします。で、先程申し上げた、村山、中野、小林さんが来てくれることになった。それがちょうど昭和六年九月六日だった。

伊勢崎の方は、ご存じかも知れませんが、南町に共栄館というちっぽけな小屋があつた。そこを借りましてね、一枚二十銭、二十円ではなくて、二十銭の入場券を作って、それで、準備したところが、それが割合うけるんですね。「ほう、小林が来るか、それじゃあ、行ってやろう。」ということ。それで、いよいよ当日になると、私とあの先日亡くなりましたが、伊勢崎で市会議員された盛男さん【菊池盛男さん】、二人で迎えに行くことになってました。本庄まで行きました。そこで、時間があるし、「どうだい一つ手前の方まで行って、向こうから一緒に汽車に乗って来た方がわかるぞ。」ということに初めて気がついて、「そうじゃねーとわかんねーぞ。」ということ。そこで汽車に乗って深谷の方へ行って、ちょうど下りが来たから、「この汽車に乗ってるぞ」ということで乗った。そしたら、中をずうっと見て歩く訳です。そしたらね、将棋指してる人が【指している人が】いるんですよ、将棋を。「へえー。」

と見てたが、この人がどうも小林さんらしい。聞いたら「はい。確かにそうです。」「じゃあ、この次が本庄ですから降りて下さい。用意して下さい。」「別に背広も何も着ちゃあいません。白地の、浴衣じゃないけど、単衣物（ひとえもの）着て、非常に気楽な格好で、それで本庄へついて降りたら、お供が二人付いてくる。「何だい。」って言ったら、「これは埼玉県の特高だよ。」で、駅の前にタクシーを二台頼んでた。ダーっと乗ったら奴らも乗ってくる気になってる。「駄目だよ、あんた方には乗せないよ。」「こりゃあ、大変だぞ、大変な事になるぞ。」と言ったが、それで【講師の方に】乗ってもらって、茂呂の、当時の佐波郡茂呂村、今は伊勢崎市北千木町の、その私（わたくし）の家（いえ）にご案内した。

それで、降りてお茶飲んで一話（ひとばなし）してた。その時に出したのが、「小林さん、何ていうのをやってくれますか。」と言ったら「台所と文学」、そういう題です。「ほー、なかなか変わった題を、『台所と文学』！」他（ほか）の方も、中野さんも、村山さんも皆それぞれ言っているうちに【話し終わった時に】、盛男さんの実家の方で夕飯の用意が出来たから、食いに来てくれ、それで行きました。そしたら、何のおかずもないんだよね、昔の農村です。そしたら茗荷（みよが）の味噌汁。茗荷の味噌汁、これが大変気に入ったと見えて、大鍋一杯、皆がおかわりして空にしちまった。「うまいもんだね。茗荷の味噌汁は。」で、食べたんなら、そろそろ会場【共栄館】の方へ人が集まっているようだから、行く用意しましょう、ということ。私の方【私の家】に戻った。

戻って一服しているところへ、馬鹿にぎやかだなあと思ったら、トラックとハイヤーが二台やって来た。来やがったなと思ったら、「あつ、警察だぞ！」、大騒動になった。わかつたけど、どうしようもないですね。私らそこで少し暴れたけども、やっぱりつかまっちゃって、後で話を聞くと、共栄館の方へも、お客が一杯入っている。そこへ、盛男さんが、裸足で駆け行ったらしい。「大変だ！大変だ！」と。

「何をするんだ！」と【警官に】言ったら「ま、とにかく署に来い。」ってんで、私らと先生方、その東京から来たお客さんと一緒に伊勢崎の警察署に運ばれました。今、六間道路になっている、あの、今日頂いた資料【伊勢崎市・通史編 伊勢崎署仮庁舎】に写真が出ていますが、六間道路の西側ですね。あそこへ木造の、粗末な、家の、伊勢崎警察署、本当に。周りにドブみたいのがあつて、そこ【警察署】へ連れ込まれた。「何だい！」と言ったら、さっきのお話【富沢さんの話】の泉特高課長ですが、「お前ら、無届けで、こんな事やるから取り締まるんだ。検束する！」「そんな、べらぼう言うな。検束にも何にも、話ばちゃんとしてあるぞ。」だけでも向こうはそんな事は聞かないです。

馬鹿にぎやかになったなと思ったら、何だか表の方で、ゴーゴーゴーする。つまり、盛男さんが共栄館へ行って、こういう訳でつぶされちゃったよと言ったら、皆怒った訳です。「何で、そんな！」「何も言いやしないし、しゃべりもしない。しもしないのに。」「じゃ、行

こうよ！」「抗議しに行こう！講師を解放しろ！」と。「無事によこせ！」と。あれから一五〇メートルから二〇〇メートル位【実際は直線距離で五〇〇メートル位】ありますな。六間道路出て、共栄館から、本町通り突っ切って、本当にちっぽけな、木造の悪い建築【警察署】です。そこへ、ワッショイワッショイ入って来た。向こうは驚いていたらしい。こんなに来るとは思わねえ。おそらく八十人、百人近く行ったと思うんです。そこで、ワイワイ騒いでいる。そして、向こうもこれでは引つ張れなくなっちゃった。多勢向こうも集めて、喧嘩になりましたな。そうすると、こっちの方が強いんです。だんだん日が暮れてくるし、電池がみんな今と違って、自転車でも頭へ電池入れて、乾電池でやる電燈です。「やっちまえー」、みんなぶちこわす。それで、前のドブ川へたき込む。えらい喧嘩になりました。そして、泉【特高課長】の方も、これはいかんといって前橋やほかへ総動員かけた。二時頃ですが、一杯になりました。こちらにも負けずにやっつてる【こちらにも負けずに動員をかけた】。戦後、あの「潮流」という本を出した伊勢崎にある吉田庄蔵さん、印刷屋さん、この奥さんは前橋の方で、坂内さんの妹さんです。そこへは早く電話が入ってたもんだから、そこから、ちよんどのいいことに県会議員の選挙で各地区に皆、いわゆる無産党がよつてている。そこへ電話が入る。一時間もかからうちに大胡から五十人、前橋から百人、えらい人数になっちゃまって、警察の中が一杯。そして、居られなくなっちゃたんです。連中は、警察署を捨てて、外へ皆出てしまった。あとにいる人は、帽子だの、肩章（けんしょう）だの引きちぎられて、よほどひどい喧嘩をやった。そのうちに向こうも、これではどうしようもないと、新聞なんかにか書かれたら、えらい事になる。こっち【警察側】も手落ちがあるという事で、一つ話をまとめてくれ、という事になって、それでは、こっち【民衆側】も代表を出そうと出てもらったのが、後に社会党から前橋市長選に出て当選された石井繁丸さん、この方などもいわゆる革新派の方のいわゆる弁護士ですから非常に頼りになる訳です。その他に今言った吉田庄蔵さん、奥さんのミノブさん、この方は前橋の朝日新聞の記者の妹さんですから、方々へ連絡をしてもらった。この方があつちこつちの選挙事務所へ電話かけてくれた。「わあ、伊勢崎はそういう騒ぎか、行ってやれ」と。まあにぎやかにになりましたね。私は、その時ちっぽけなボロ警察の、何ですか、留置場といってもゴミ入れみたいなもんですが、そこへ入れられていたんですが、だんだん外の形勢が変わってきた。すごい勢いになってきた。大喧嘩というか大騒動ですね。これは大変だぞ。今でいえば騒擾罪（そうじょうざい）かなんかで、みんな御用になりますね。

向こう【警察側】も、色々欠点もあつてし、そんな事だったからそれもできない。それで今言った石井繁丸さん、吉田庄蔵さん、もう一人いた、佐田一郎さん、今の玄一郎の親父かな、じいさんですよ。これらがまだ若い頃で張り切っていた。それで、こちもいくら代表が出て、向こうからも出て、話し合いをして、この事は新聞に出さない事、犠牲者は出さない、東京から来ているお客を無事帰すことと皆（みんな）もここで罪にしないで全部解放すること。

そういうふうな申し合わせというか妥協ができた。良からうという事で、お客も皆本庄から帰されたし、私も、それってんで、家（うち）へ皆（みんな）帰った。という事で、このいわゆる、昭和六年九月六日の文芸講演会、文芸なんか一字もない、その講演会というのが、そんな模様で終わった訳です。

なる程、さつきお話【富沢さん】があつたように、こんな騒ぎはほかになかったです。群馬県だけでなく日本でもめずらしい騒ぎですよ。伊勢崎警察署占領事件という、これはえらい事件ですよ。しかし、実際あつたんですから。

そんな事で、その後は小林さんにもお目にかかる機会もなくて、翌年【翌々年のこと】、今の事件が六年ですから八年には、築地警察で拷問されて亡くなった。これは江口キヨシ【江口渙の本名】さんから聞いた、江口渙さん、この方も茂呂に来た事がある。「菊池君、あれは殺人だよ。拷問で殺してしまつたんだよ」。成程、今色々のものを見ると、殺された場合もあるらしいです。

そんな事で、私と小林さんとのあはれは、そう、色々もつと詳しい事がありますけれども、この位にして、またいざれ話したいと思えます。どうも体の具合がちよつと悪いんで、うまく話せませんでした。これで【終わります】。

【1995年5月7日大沢勝幸筆記、2008年8月13日長谷田直之校正】

小林多喜二没後20周年記念集会

とき 四月十八日 午後一時半から四時
 ところ 伊勢崎市西アラス 会議室
伊勢崎市中野町 三五
 TEL. 〇七〇 〇九八八

会費 三〇〇円（資料代として）

一 あいさつ 会長 佐藤正二

一 あいさつ 収養委員 有馬良一

一 記念講演 昭和六年五月六日文章協会の
 弾正半井について
 前橋市立文芸館理事
 前橋市立文芸館 富沢文

一 「おれし日の小林多喜二」について
（多喜二の） 菊池敬清

主催 池田雄雄 池田雄雄 池田雄雄 池田雄雄

後援 日本共産党伊勢崎地区委員会
 伊勢崎 佐藤正二 有馬良一
 伊勢崎 佐藤正二 有馬良一
 新日本婦人の会伊勢崎支部
 日本共産党伊勢崎地区委員会

協賛

協賛



小林多喜二らが武装警官に検束された
 菊池敬清さん（右下、1941年ごろ）宅

（2007年12月31日付「しんぶん赤旗・日刊」）

7 新資料 中野重治年譜の一部 (『中野重治全集』別巻、年譜・書誌・索引、1998年)

一九三一年(昭和六年) 二十九歳

- 二月十五日、改造社版『現代日本文学全集』第六十二篇「プロレタリア文学集」に「中野重治集」として小説五篇、翻訳一篇が取られる。
- 二月十七日、築地小劇場でのナッパ主催「戦旗」「ナッパ」防衛大講演会」で講演「ナッパ」二月号。
- 二月、市外落合町上落合四八一に転居。
- 五月五日、小林多喜二、徳永直との共著「壘」二篇、太陽のない街・鉄の語」が改造社から刊行される。
- 五月十四日、築地小劇場で日本プロレタリア作家同盟第三回大会がひらかれる。同盟報告のうち、「理論的・批評的活動」を報告、ひきつぎ中央委員に推される。(ただし、この大会では役員選出が終了、第二回大会選出の役員留任を決定)
- 五月二十八日、「詩の仕事の研究」その一を書く。「プロレタリア詩」七月号に発表。
- 「農民文学の問題」を「改造」七月号に発表。
- 七月六日、市外落合町上落合四六〇の事務所において、日本プロレタリア作家同盟第四回(臨時)大会ひらかれる。中央委員(常任)に選ばれる。(委員長江口漢、書記長小林多喜二)。
- 七月十五日、春陽堂版「明治大正昭和文学全集」第五十一巻「短篇集第一」に「中野重治篇」として小説二篇が取られる。
- 七月二十五日、上野自治会館でのプロレタリア文化団体共催の「戦旗」の夕べ」で「戦旗」についての希望」と題して講演。夏、日本共産党に入党。
- 「通信員 文学サークル 文学新聞」を「ナッパ」八月号に発表。
- 九月六日、伊勢崎市の全農青年部の講演会に小林多喜二、村山知義と出席、検束される。
- 九月二十日、「文化聯盟の結成へ」を書く。「ナッパ」十月号に発表。
- 九月二十七日、日本プロレタリア作家同盟東京支部主催「プロレタリア文学」についての「質問と討論の夕」に出席。
- 「過去の詩の研究」を十月十五日、内外社発行「綜合プロレタリア藝術講座」4に発表。

本資料も早瀬演さんから教えられました。この年譜の「九月六日」には「全農青年部」の要請とあります。また本事件の「九月六日」の時点で非合法の共産党に入っていたのは、この中野重治(本年譜の夏)と村山知義(1931年5月)です。多喜二が入党するのは、本事件直後の10月と言われています。

③ 同時代人の記録・記憶資料

1 伊藤信吉「群馬県の左翼運動・その断片」の一部 (『回想の上州』所収、1977年)

加部英司ともう一人の誰か、それに私との三人で、警察部特高課へ取材にいったことがある。新聞記者であるからには、日常的に警察部各課へ出入りしているわけだが、そのとき三人が特高室に入ると、課長が主任だが、比較的かゝる口調で、三人を迎えながら何か言った。どんなことを言ったのか、私にはよく分らなかつた。その笑い顔からして、何か軽口をたいたのであつたらしい。すると加部英司の顔に髭が走つた。

帰り際に、彼はちよつと、と言つて特高課長が主任だかを廊下へ呼び出し、低い声ではつきりと抗議した。相手はひどく恐縮し、やはり低い声でしきりに陳謝した。加部英司をはじめ、三人はそつて治安維持法違反に関係があつたので、それを「やあ、お揃いで」といつたふうにならぬのであつたらしい。それに加部英司は抗議したのであつて、そういう点はきびかつた。

私のような軽微な治安維持法違反とちがつて、小林邦作、加部英司は「九・二三事件」で検挙された人たちである。昭和七年(一九三二)九月二十一日未明の検挙は全県的におこなわれ、多数の人たちが長期拘留された。いわゆる第三次群馬県共産党再建事件である。この大検挙以後、群馬県下の共産党系の運動は再起不能に追いこまれた、といふ。検挙者のうち党员は五、六名だつたといふ。警察署で凄く拷問を受けたけれども、党员でない——然し党员に等しい活動をしてきた小林邦作は、危ふく免がれて起訴留保だつた。彼の逮捕歴は八回に及び、中には昭和六年秋の伊勢崎警察署占拠事件のような、ちよつと変つた事件もあつた。

これは伊勢崎を中心とする「ナッパ」関係者が小林多喜二、中野重治、村山知義、三好久子(もしくは清洲すみ子。女優)らを招いて、伊勢崎町の共栄館という貸劇場で文芸講演会を開こうとしたときの出来事だつた。開こうとしたというのは、講演会直前に、伊勢崎の世話人宅で座談会をひらいていたところへ警察官が押しかけ、主催者、講師を検挙してしまつたからである。

この事態に激昂した聴衆三〇〇名くらいが警察署へ押し寄せ、一時的に警察を占拠した。主催者、講師らは翌日釈放されたが、これで講演会は不可能になり、詩の朗読をしたくらいで半ば流会になつた。このとき聴衆と警官との乱闘があつたが、警察側に弱味があつたためか犠牲者は出なかつたといふ。

当時私は雑誌「ナッパ」の編集をしており、中野重治から「君の郷里の講演会だから、メッセージをあずかつてゆこう」と言われた。それでメッセージを書いた覚えはあるが、果して伊勢崎で披露できたかどうか。いや、メッセージ披露などどうでもいいような、こういう事件が現地で起きていたのである。

第三次群馬県共産党事件における加部英司の検挙内容について、私は何も知らないが、その一本気の性格からして、積極的に活動していたと思われる。

『群馬県史・通史編』で初めて紹介されたのが、本資料のメッセージの部分です。本章では、伊藤信吉さんと本事件の当事者菊池(小林)邦作さんとの交友関係が語られています。

2 富沢実「官憲弾圧のなかの府県会議員選挙」の一部（『群馬県社会運動物語』所収、1968年）

候補者の姿が見えない選挙に没頭していたある夜、当時福田狂二によって東京で発行されていた『社会運動通信』により、郷里群馬でも左翼運動が盛り上がり、伊勢崎ではプロレタリア作家による講演会が弾圧されて、警察署占領事件が突発したことを知った。私は、やがて青森合同労働組合の常任書記となって、青森日報の新聞争議に関係して検挙されたりしたが、この伊勢崎事件はいやが上にも望郷の念をかきたてたのであった。

3 新資料 富沢実・多喜二没後六十周年記念集会の講演「昭和六年九月六日文芸講演会弾圧事件について」（1993年）

（一）は読み方、【】は筆者の注

どうも皆さん今日は。先生と言われるような、あれじゃないんですが、久しぶりで伊勢崎にまいりまして、もう何十年も前に何かと会議なんかで一緒にいたしました、高橋さん【会場にいる高橋一二（かずじ）さん】なんかとね、大変懐かし、今更のように月日の経つのを思い起こしています。

私は、前橋中学、今の前橋高校なんですが、そこを出てから東京で夜間の学校に参りまして、しかし当時は大変就職難で郵便局の行員なんかでもして学校に通うという積もりがありました、が、なんか就職がうまくいかない。当時、私、中学時代から社会の矛盾を感じていました、中学での弁論大会で幹部に指名されまして、その弁論大会の中で、弱者のためという演説をいたしました、大変これが反響を呼びまして、当時のことでございますから、直ちに特高の方へ学校から話がありまして、それから卒業するまで何回も校長先生に呼ばれまして、注意を受けまして、もう既にその時にブラックリストに載っていたんではないかという風に思っています。しかし、当時の校長はですね、今思うと大変、何て言いましょうか、大正デモクラシーの所産の一人、東大の文学部出て、あちこちの先生をしていたわけですが、大変理解のある校長でございました。私を追放することなく、卒業させてくれたわけでございます。

私は早くから農民運動に興味を持ちまして、たまたま友人が弘前の旧制高校を社会科学の研究会事件で追放になりまして、六ヶ月もブタ箱にいたわけですが、学校を卒業する寸前に退校になりました。それを機会に「青森で農民運動をやらなきゃ、富沢君、青森に来ないか。」

というようなことですね、「それじゃあ。」というんで、青森に行つて、青森の当時の黒石町今黒石町でございますが、その農民組合、農民組合っていつても、消費組合も一緒にやっています、そこで働くことになりまして、初めて実践運動に入ることになりました。黒石というところは、ご存じの方もおるかと思うんですが、秋田雨雀さんの生まれた所で、大変文化水準の高い街でございまして、私にも、若干文学的なことにも興味がありますので、色々友達を得ることができました。黒石での、私の農民運動の生活というのは、大変意味がございました。

それが、昭和六年たまたま第二回の普通選挙【県会議員選挙の誤り】がございまして、【投票日】九月二十五日でしょうか。昭和六年、私は、その農民運動の関係で、柴田さんという人が立候補しましたんですが、この人小作争議で、追い飛ばされていて、表に出られないんです。表に出ると、とっつかまって、それで影の候補者ということですね、もっぱら私達が後方部隊で選挙運動をやるという風なことでございました。惜しくも落選いたしましたんですが、この人も九十何歳で亡くなりました。その頃ですね、『社会運動通信』っていうのが出てまして、これは福田狂二という、昔の無産党の指導者の一人だったんですが、この方がいわゆる右翼的な立場にいたんですが、その『社会運動通信』は案外ですね、幅の広い記事を書かして、私も時々見ていたんですが、その時に伊勢崎の事件が大きく載りまして、私は群馬県というところはですね、須永好さんの影響が強くて、農民運動も無産党の運動もですね、あまり「合法主義」っていうて活発でないと思っていたんですが、伊勢崎事件という記事を見まして、これはもう群馬に帰らないといけないというようなことで、帰ってまいりました。私は、したがって、伊勢崎の警察署占拠事件というのは、身を以て体験いたしませんで、色々の資料や当時参加した人たちのお話を聞いたりなんかして、拙い文章にまとめました。したがってですね、当時関係をなさった、本日お見えの菊池敏清さんなんかからですね、生々しいお話を聞くことが、むしろ結構なことではないかという風に思います。

小林多喜二以下、他五名ですが、全部で六名のように言われていますが、村山知義とか、中野重治なんかもいたんでしょうかね。それから、そのほか女優の方も見えた、というようなことございますが、あの菊池邦作さんの出した、『柿』という随想がございましてね、あれに当時の関係者の皆さんが思い出の感想をやっておられるわけでございますが、その中に女優で三好久子というのが、あの時お見えになったという風なことが書いてあったかと思うんですが、これはですね、私は三好久子という人をよく存知上げてまして、旦那さんとも懇意で、ある一時期親しくしてまいりました。新築地劇団に関係しておったんですが、戦後はですね、やはり新劇の「仲間」という劇団に関係なさっております。前橋芳演なんか、私も會員の一人でございますので、時々三好久子の芝居を前橋で見ることが出来たんですが、「伊勢崎の事件にあんたは関係したんじゃないか。」というようなことを、私、問いました

ことがあったんですが、「富沢さん、そのことについては他（ほか）の人からもそういうこと言われたんだけど、どうゆんでしょね。私、そんなことはないんですけど。」というようなことで、否定をされておりました。ならば、私はおそらく三好久子さんはあの時に一緒にいなかったんではないかという風に今では思っている訳です。したがって、その他の関係の女優さんかも知れません。というのも、私、昭和七年の夏ですね、新築地劇団からメザマシ隊というのを、そういう形で、職場や農村へですね、演劇をもってオルグに出かけると、アジプロをやるということがずーっとやられてましたんですが、私の友人で新築地に関係している青年がいます、その人を通じて、主に前橋から西部【群馬県西部】で半非合法的なプロレタリア芝居、演劇をやりました。おいでになってくれた方は、浮田左武郎、それから大胡から出た田村稔（みのる）、それから三好久子と三名の方でございました。これがですね、後で、そういうことがあったというんで、だいぶ、私、特高に締められました。半非合法じゃないと、それは出来ませんから、もちろん警察なんかには届け出はしなかった訳でございます。その時に三好久子はですね、やはり前年の伊勢崎事件に関わっていたと、その時の追い返された文学者達と一緒に行動を取ったということであつたとすれば、翌年半非合法で農村に潜り込む、そのアジプロ活動に群馬に来るといことはなかったんじゃないかという風な気もいたします。まあ、そんなことがあつてですね、これはまた、菊池さん【菊池敏清さん】あたりに、その事件の状況をお聞きすれば、『柿』の中に出てくることより鮮明になってくるんではないかと思えます。

今日はまあ、小林多喜二のことを主として、中心に据えて、この会が催されるわけなんです、私は小林多喜二にお目にかかったということはないんですけど、築地小劇場でプロレタリア作家同盟の書記長としてですね、当時プロレタリア演劇同盟、左翼劇場とか、新築地とか、そういう劇団の方々がよって、演劇同盟を作っておりましたが、その世界大会があるというんで、その派遣のための歓送会みたいなのがございました。その時に小林多喜二がお見えになってですね、激励演説をされました。着流しで来られて、大変大きな声を、それほど背丈は大きくなかったと思うんですが、ずんぐりしたような感じを覚えていますが、大変音声の大きな音声を出して、激励演説をされました。私は、なんともかんとですね、その時に小林多喜二の顔を見た、それだけでございます。したがってですね、小林多喜二のあとは、作品でもって、彼の身边に迫る以外ないわけでございます。戦後、江口渕という作家がおりまして、この方がですね、「小林多喜二の死」というのを、薄いパンフでロゴスという本屋から出されまして、非常にこれはですね、小林多喜二が【の】蓋を取って、お互い同志が多喜二のうちに集まってきて、お葬式の打ち合わせをするとか、色んなことを細々（こまごま）書いて、非常に今日（こんにち）では得難いパンフだそうですが、それを私は時々ひっくり返しては読んで、見ている訳でございます。

伊勢崎事件のことについてはですね、私も皆さんにお聞きしたりなんかして、先程申し上げたように文章には綴りましたが、実践的に、その襲撃事件に関係したわけございませんで、生々しいご報告ができないのが、残念でございますけれども、あの事件がですね、どうして、佐藤先生【佐藤正二さん】もさつき言われましたが、一人の犠牲者もなく、おしまいになったかということについて、いまでも色々の疑問を持つわけでございます。この事件に対する所感という風な観点から申し上げますと、まず官憲の側で、一つはですね、状況判断に多少甘さがあったんではないか。著名な作家ではあつてもですね、それほど大きな集まりになったり、なんか事が起こるとい風なことは、ないという風な判断が高にはあつたんじゃないかという風に思うわけです。同時にですね、県会議員の選挙がもう既に旧法が始まりましたから、官憲の取り締まりの薄さというのも、【取り締まるには】十分ではなかったという点もあつたんではないかと思うんです。それから、この、何としても、参加した大衆の中から犠牲者を出すということについてはですね、これは一面的には、行うことはできないんだという判断は当局にあつたかと思うんです。幾人かの検挙者を出せば、当然一晩無警察状態だったわけでございますから、官憲側にも当然の責任処分が行われるということは当たり前のごとでございますが、当時の警察側の総指揮を執ったのは、泉特高課長、これ泉守紀（もりき）という人ですね。私なんか、何回かお目にかかったことがありますが、直接調べられたことはないんですが、この泉特高課長の下に二階堂という、当時巡査部長だったかどうか、その位の資格の人で、特高課の課員がいました。これは非常に峻烈な男で、これには416（よんいちろく）の方々、それから、その後昭和五年に起こった『無産青年新聞』、これは竹部松次郎さんって人で、前橋の建具屋の人で、どちらかというと、今日で言えば社会党系の人ですが、この人を中心にした事件がありました。この二つなんかは、この二階堂という、この泉特高課長の子分がですね、非常に辣腕（らつわん）を振るって、テロ・拷問の先頭に立って、やつたという話を聞きます。これを泉特高課長、非常に力強い右腕として、群馬に起こった事件のいくつかをですね、成功裏に処理していたと。この功績をですね、官憲側としては無にすることはできない。当然泉特高課長は責任を取ると、伊勢崎事件で、そういうことであつたかという風に思う訳ですが、この泉を追放することは官憲側としてはどうしてもできなかったんではないか。そういうことはですね、石井繁丸さんなんかをメンバーとする、平和裏にこの問題を処理しようという、そういった妥協の方向へですね、泉特高課長中心に事態は動いていったという風に、観察を、私はしてる訳なんです。したがってですね、ほとんど伊勢崎事件くらい的事件で、一人の犠牲者が出ないというのは、おそらく他にはなかったんじゃないでしょうか。非常に珍しい事件でございます。同時にですね、双方の警察署占領事件の中心人物にですね、やはり何て言いましようか、群馬における統一戦線の中での活動分子、こういう方々、かなり合法主義的な面での関係者は、活動家は大勢いた。それらの代表的な人々

はですね、遠藤可満さんとか、あるいは、遠藤一郎君、それから、佐田一郎、そういうった方々がですね、動いたというのはですね、当時の群馬における、いわば統一戦線というのがですねある程度形成されていたということがあったんではないかと。その背後にある、その勢力というのは社会民衆党です。この社会民衆党は、問題かも知れませんが、大正十五年に労働農民党、農民労働党【即日禁止され、労働農民党結成になる】ができた。これはですね、安部磯雄という人が委員長をやりましたが、その後労働農民党の左派系ですね、これに分かれまして。この方は大山郁夫さんが委員長になり、細迫兼光さんが書記長になった訳なんです。左派の労働農民党、その後、両派【社会民衆党と左派の労働農民党】の間の中間派ということで日本労働党ができました。この日本労働党の中には、強戸の須永好さんなんか積極的に参加をしています。したがって、当時は、だいたい三つの無産政党がですね、勢力を持っていただけてございますが、群馬ではですね、この社会民衆党、あえて言えば今日では民社党ですか、この社会民衆党の力が割合にあったわけでございます。菊池邦作さんが、この結党を記念して、前橋で記念講演会を主催をされたことがございました。私はまだ小さかったですから、親父の外套（がいでう）を借りて、それをつつかぶって、社会民衆党の演説を聴きに行きました。ご案内の方がいるかも知れないが、鈴木文治なんて人が来て話をしました。その中で、菊池邦作さんの話が一番聞き応えがありました。どうして、こういう方が社会民衆党を作るのかなあ、作ったのかなあという風な感じを、実は当時持りました。しかし、この伊勢崎事件が起こったときの状況は、そういうことで、社会民衆党の影響は、かなりあちらこちらにあった。これがですね、やっぱり当時の統一戦線の背景の力として、ものを言っていたんではないかと思うわけなんです。したがってですね、この事件の解決の仕様によっては、群馬の合法戦線、合法無産政党、合法的な農民運動、この将来に大いにかかわってくるという判断もですね、官憲との局面にはあったんではないかと思えます。

坂内みのぶさん、ご健在かどうか、私もうしばらくお会いしておりませんが、当時のことで坂内みのぶさんが非常に活躍されたという風なお話を聞きました。しかし非常に、当時の状況としてはですね、青年活動家、まあ、菊池敏清さんなんか、その一人だと思わんですが、斉藤力（りき）さん、次は弥勒寺（みろくじ）清さん、菊池盛男さん、そういうった方々のお名前が浮かぶ訳でございますが、何と致しましても、菊池邦作さんが佐波伊勢崎地区の指導者の存在ではなかったかという風に思います。その菊池邦作さんの影響を受けた佐波伊勢崎の青年諸君がですね、おそらく、この伊勢崎事件の中心勢力でなかったかと思うわけでございます。色々この事件についての評価、それから、今日までずっと革命的と言いましようか戦闘的な、そういう気概が、伊勢崎佐波には変わらず伝統的に伝わっているという風に、私は信じております。

もともと佐波伊勢崎は、キリスト教の運動が盛んで、森川抱次さん、県会議長までなされましたが、森川さんなんか、キリスト教社会主義の先駆者ではなかったんでしょうか。名

和村に、この辺ですか、【講演場所の伊勢崎市民プラザのすぐ西が旧名和村】キリスト教社会主義が上陸してきたんだというような話を聞きましたが、森川さんなんかも救世軍の群馬の創設者でございましたが、県会議長になって初めてブラックリストから消されたそうです。非常に長い間の注意人物でございました。だいたい森川さんも、お蚕の種、蚕糸業に携わっておられたようですが、だいたい蚕糸とか、あるいは生糸とかの関係がですね、群馬では新しい、先進資本主義の国から伝わってきた、流れてきた思想と結びついて群馬の地に根付いたということは、ある程度言えるという風に思いますが、あの「群馬青年共産党事件」の高津渡さんの親父さんも、いわゆる蚕糸業、高津仲次郎もそうです。まあそれを言えば、菊池邦作さんだって、蚕糸でやつてるかもしれないませんが、県下あちらこちら、いわゆるお蚕の関係、生糸の関係、蚕糸業のことについてのことを、いわゆる調べますと、非常にキリスト教社会主義との関係が非常に強いと改めて、そういうことを近場（ちかば）で感じております。

これを伊勢崎事件についてですね、堤源寿さんが『不屈』の中でちょっと書いておりますが、何か遠藤可満さんから連絡を受けて、急ぎよ伊勢崎に駆けつけた、という風なことが書いてありますが、若干堤さんの記憶に誤りがあるんじゃないかと、私、思うんですが、無産団体協議会の第二回の会合が行われていて、そこに連絡があったという風に書いておりますが、この点は少しご本人には聞いてみたいと思うんですが、無産団体協議会というのは、第一回に私も参加いたしました。それは、昭和七年の初めだったと思われまます。角田儀平治さん、当時は角田守平さん【後に改名】でございますが、角田さんが救援運動の仕事を非常によくやっておられまして、その関係ですね、群馬県での救援会の活動を広げよう、赤色救援会、そういうことでですね、それを中心に集まりを持ったということ、第一回の会合には私も顔を出しました。第二回ということになりますと、これは昭和七年の春過ぎてからで、昭和六年にあった伊勢崎事件とは少し食い違いがございます。まあ私なんかもそうですが、非常に記憶がそぞろになってきてですね、ある事件のこと、ある言葉のことに調べる場合にですね、非常に記憶が不確かでございます。やはり史実を突き止めて、後世に残すという点では、責任が持てませんから、大勢の方々の記憶をたどって、正しいものを作り上げることが必要ではないかという風に思います。

佐波伊勢崎の革新運動、青年運動、農民運動や政党的運動、非常に先駆的な運動がございました。私は随分青年時代激励をされ、得るところ、教えられるところが非常に多かったです。それに今それこそ昭和の末路に入って、幕末を語るというような非常に昔の話になりましたけれども、脈々としてですね、佐波伊勢崎の、このたくましい、青年の血潮はですね、これからの当地域の革新運動の鋭気となって、いつまでも燃えたいという心から期待を申し上げまして、私の、なんかあんまりまとまった話になりませんが、後は菊池敏清さんの話を聞きたいと思えます。どうも十分ではございませんが、一言申し上げまして、責任の一端を果たさせて頂きました。

【2008年8月16日長谷田直之筆記】

4 伊勢崎市(小池善吉)「伊勢崎署占拠事件」(『伊勢崎市史・通史編』所収、1991年)

伊勢崎署占拠事件

昭和六年九月六日小林多喜二、村山知義らを迎えて文芸講演会が伊勢崎町の共栄館において開催されることになっていた。呼んだのは伊勢崎町の社会民衆党支部を中心の文化団体であった。この日、伊勢崎警察署占拠事件が発生したのである。この事件の経過は茂呂村出身の当事者の一人菊池邦作が書いた「群馬県社会運動の歩み」(『労働運動史研究』第十九号、一九六〇年一月)に詳しい。昭和六年九月五日の『東京朝日新聞群馬版』は「佐佐木無産青年主催の文芸講演会が六日午後六時から伊勢崎共栄館で開催、講師は布施辰治、村山知義、小林多喜二、立野信行、岩藤雪夫ほか女流作家等である」と簡単に報じていた。

菊池の記述によると「社会党といっても実は、日本共産党のフラクション活動を負負するこの地方の若い青年達は、単なる合法的講演会では満足できず、午後二時開会の前に、講師と午餐を共にしながら、中央の情勢を聴きたいというが狙いであった」といふ。二十人ほどの座談会を終え、昼食もすませて会場に向かおうという際に一斉に検挙された。理由は、座談会が無届集会とみなされたためである。被検挙者は講師全員と地元小林(菊池邦作、菊池盛男、斎藤力、岡田勲、弥勒寺清らであった。主催者側はほとんど全員が検挙され、残ったのは吉田庄蔵(後の瀧流社老、みのぶ夫妻だけであった。吉田は集まった会場の聴衆に対して事情を訴え、開会不能を詫言びたが聴衆は一向に帰ろうとしない。他方この事件は、みのぶ夫人の電話連絡によって一時間ほどで県県下に伝えられ、県内各地から無産運動家たちが集まって来た。こうしてこの問題は拡大していった。

そして会場の聴衆をまじえた大勢が、無産運動家たちと伊勢崎警察署に押しかけ、占拠するという事件となった。結局は代表団が選ばれ、急務未了した泉特高課長との交渉の結果、妥協が成立、群衆は退散した。この時の代表団は石井繁丸、坂内一登司、遠藤可満、佐田一郎、堤源寿、沢沢広吉、吉田庄蔵らであった。

九月八日付「上毛新聞」によると「東京から来たナップ作家小林多喜二氏はか数名及び佐波郡内無産党員小林邦作氏はか数名の検束騒ぎに就いて、その理由は伊勢崎署で絶対秘密に付しているのだから判然としない。なお七日朝今瀬署長並びに党員の言質によると、同朝八時頃石井繁丸はか代表者が釈放願いに出現する前に自動車で本庄駅に送り東京に帰還積放したものと解せられる。なお郡内党員は遅くも正午頃までに釈放される模様であった。



写真4-17 大衆に一時占拠された警察署の建物

なお「検束の経過」は、およそ次のように報じられている。①東京から来た弁士一行六人、佐波郡党員四人は伊勢崎町の講演会場に赴く前、佐波郡茂呂村菊池盛清方で検束された。②その場に居合わせず、検束の理由を訊し、かつ釈放願いに行った菊池盛男は署で検束された。③前橋から応援の石井繁丸はか党員を合わせ五十余人は同夜十一時頃から七日午前二時頃まで交渉を続け、一時大混乱に陥り十余人は検束された模様であるが間もなく釈放、一同は事務所へ引き上げた。事務所は斎藤力方である。「然して伊勢崎署は非常招集を行い、県警察部からは泉特高課長以下数名末崎、協力疾風迅雷的の大活動振りであった」といふ。

九月九日の『東京朝日新聞群馬版』を見ると「過般の群馬共産党事件以来、戦闘的分子は絶滅されたかに見えるが、伊勢崎町を中心に最近とみに根を張って全協の魔手動き、一方ナップ支部設置も進められていた事実が明らかとなり、警察当局は県議選取締りのごたくまぎれに策動が行われるのではないかとお神経をとがらし警戒中である」と報じている。

5 伊勢崎市(小池善吉)「消費組合運動」(『伊勢崎市史・通史編』所収、1991年)

消費組合運動

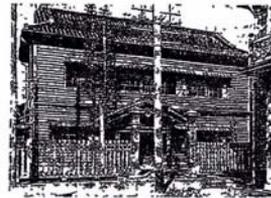
昭和前期における無産運動の一環として消費者対象の組合運動が伊勢崎町に生まれたことも特記されよう。昭和七年一月関東消費組合連盟に所属する店舗が設立され、食料品を中心に扱った。群馬県下で最初の消費組合運動であったと言える。その中心者は茂呂村の菊池盛男であった。

『日消連日本消費組合連盟本部ニュース』第八号(昭和九年二月二十八日)によると、日消連主催の第三回全国大会前にして、「正式加盟と日消連の旗の下に大衆的活動による経営強化への途」という一文が示され、全国各地における総会開催の日程が掲示されている。その中に阪神、札幌、東京、京都各消費組合と並んで、群馬伊勢崎消費組合の名が出てくる。そして「三月四日」総会開催となっている。

6 群馬県(小池善吉)「文芸講演会と伊勢崎警察署占拠事件」(『群馬県史・通史編』所収1991年)

文芸講演会と伊勢崎警察署占拠事件

昭和六年九月六日、伊勢崎町の社会民衆党支部を中心とする文化団体が、小林多喜二(作家)、中野重治(詩人)、村山知義(劇作家)、三好久子(女優)らを迎えて、同町共栄館で文芸講演会を開催しようとしたところ、トラクタ二台に分乗した警官隊が、講演会直前に世話人宅で座談会をしていた主催者・講師を無届集会という理由で一斉に検挙する事件が起こった。この知らせを受けた聴衆三〇〇余と県内の無産運動活動家(石井繁丸、遠藤可満、佐田一郎)は「講師を奪還しろ」と伊勢崎署へ殺到し、防備の警官と乱闘のすえ、一時的に警察署を占拠してしまつた。石井繁丸代表団は、駆け付けた泉守紀典特高課長と交渉に及び、「(明)朝講師を釈放する」「主催者側は責任者一人を残し全員明日釈放する」「(この騒ぎで犠牲者は出さない)(前掲)の妥協が成立した。九月八日の「上毛新聞」は「尚七日朝今瀬署長並びに党員の言質によると、同朝八時頃石井繁丸代表者が釈放願いに出現する前に自動車で本庄駅に送り、東京に帰還積放したものと解せられる。尚郡内党員は遅くも正午頃までに釈放される模様であった」と報じている。



145 伊勢崎警察署 (伊勢崎市立図書館提供)

なお社会問題資料研究会編「昭和七年一月〜六月社会運動情勢」における前掲地方裁判所管内の共産主義運動状況中で、プロレタリア文化団体の項をみると、現下管下ニハ該当団体ナキモ昭和六年九月中管下佐波郡茂呂村東京帝大文科二年菊池邦作河主催ノ下ニ伊勢崎地方左翼分子ヲ糾合シ作安同連盟準備委員会組織セントシ、同月中ナップ作家中野重治、小林多喜二、村山知義等ヲ聘シ講演会ヲ開催セムトシタルゾ、秘密会合ナリシカモ何レモ明確伊勢崎署ニ検束セラシ、其ノ目的ヲ達セス、…と述べている。

当時雑誌「ナップ」の編集をしていた本県出身の詩人伊藤信吉は、中野重治から「君の郷里の講演会だから、メノセシをあずかってゆこう」と言われ、メノセシを書いた覚えがあると回想している(『伊藤信吉』)。

このような事件が「一人の犠牲者も出さずに終結をみたことは、他に例をみず、全国でも珍しいケース」(斎藤実)であった。